



九州大学医学部保健学科 20周年記念誌



九州大学医学部保健学科 20周年記念誌

<b>第1章</b>	<b>九州大学保健学科のあゆみ</b>	
	1-1. 分野の活動：FD、社会連携	4
	1-1.1) 看護学分野	
	1-1.2) 医用量子線科学分野	
	1-1.3) 検査技術科学分野	
	1-2. 学生の現況	14
<b>第2章</b>	<b>寄稿文</b>	
	2-1. 学内役職	16
	2-2. 現職教員	26
	2-3. 退職教員	32
	2-4. 学外関係者	37
<b>第3章</b>	<b>卒業生と現役生からのメッセージ</b>	46
<b>第4章</b>	<b>資料編</b>	
	4-1. 写真	64
	4-2. 国際化の実績	74
	4-3. 社会貢献の実績	80
	4-4. プロジェクトの実績	82
	編集後記	90

## 1-1.1) 看護学分野

## 1. 分野FD

開催日/事項	活動の概要
平成24年度 看護学分野FD	<p>テーマ：「今後の教育の在り方について～基幹教育院の構想と保健学・看護教育について～」</p> <p>講師：基幹教育院長代理 若山正人先生</p> <p>参加者：33名</p>
平成25年度 看護学分野FD	<p>テーマ：「漢方看護学教育の導入について～」</p> <p>講師：東京大学大学院医学系研究科附属医学教育国際研究センター教授 北村聖先生</p> <p>参加者：27名</p>
平成26年度 看護学分野FD	<p>テーマ：「看護学教育課程のカリキュラム再考」 「学士課程における人材育成と基本方針と到達目標について」</p> <p>講師：中尾分野長 「看護教育におけるFDマザーマップの活用について」</p> <p>講師：小野教授</p> <p>グループワーク：平成28年度入学者を想定したカリキュラム案について</p> <p>参加者：29名</p>
平成27年度 看護学分野FD	<p>テーマ：「本学における看護学分野の教育・研究に関する国際化推進に向けて」 「国際的に活躍できる看護実践者・研究者の育成」</p> <p>講師：広島大学大学院 森山美知子先生 「スーパーグローバル大学創生支援～出島の国際化から全国的国際化へ～」</p> <p>講師：九州大学SHAREオフィス支援室長 福島泰様 「九州大学基金支援助成事業について」</p> <p>講師：九州大学総務部基金事業課基金事業係長 溝口幸代様</p> <p>グループワーク：看護学分野の教育・研究の国際化推進計画について</p> <p>参加者：29名</p>
平成28年度 看護学分野FD	<p>テーマ：「看護学分野の災害発生時の教育の保証に向けて」 「熊本震災の経験－大学での教育の保証に向けて」</p> <p>講師：熊本保健科学大学 中村京子先生</p> <p>情報共有：「保健学科の災害対応への施設委員会の動き」 「学生加入保険について」</p> <p>グループワーク：災害発生時の教育の保証のために準備しておくべきことについて</p> <p>参加者：29名</p>
平成29年度 看護学分野FD	<p>テーマ：「大学院教育の充実・活性化に向けて」「大学院入学者の現状と課題」</p> <p>講師：藤田君支教授</p> <p>情報提供：「大学院リクルートワーキング」</p> <p>グループワーク：大学院教育の充実・活性化に向けての方策</p> <p>参加者：30名</p>
平成30年度 看護学分野FD	<p>テーマ：「看護教育に活かすデザイン思考」</p> <p>講師：芸術工学研究院教授 平井康之先生</p> <p>ワークショップ：教育の場、看護の場を考える</p> <p>参加者：28名</p>
令和元年度 看護学分野FD	<p>テーマ：「教育における安全の指針～学外活動編～」</p> <p>講師：人間環境学研究院共生社会学准教授 飯嶋秀治先生</p> <p>グループワーク：学外教育活動中に経験した事件・事故・ヒヤリハットについて</p> <p>参加者：30名</p>
令和2年度(WEB開催) 看護学分野FD	<p>テーマ：「カリキュラム改正に向けたAI教育導入の検討」</p> <p>講師：藪内英剛教授</p> <p>グループワーク：カリキュラム改正に向けたAI教育導入の検討</p> <p>参加者：29名</p>

開催日/事項	活動の概要
令和3年度(WEB開催) 看護学分野FD	<p>テーマ：「With/Afterコロナにおける国際交流の在り方」</p> <p>講師：橋口暢子教授</p> <p>グループワーク：With/Afterコロナにおける国際交流の方略</p> <p>参加者：34名</p>

## 2. 社会連携(人材育成)

開催日/事項	活動の概要
平成24年度 九州大学病院プロッサム人事交流	フットケア外来における患者教育に関する研修を実施した。
平成24・25年度 福岡県専任教員養成講習会	看護学分野教員が専任教員養成課程の講義・演習を実施した。
平成24・25年度 新人看護師育成プログラム 実習指導要項開発プログラム	文部科学省大学改革推進事業「看護職キャリアシステム構築プラン、看護実践力プロッサム開花プロジェクト」において、九州大学病院看護部と連携し、新人看護師への研修、実習指導要項を開発した。
平成24～令和3年度 九州大学病院看護部との 人事交流事業	九州大学病院看護部より副師長が1年または2年間に席出向し、看護基礎教育から臨床における現任教育までの継続した教育を実践するために「保健学協力講師」の称号が付与され、看護学分野の教員とともに学生の教育活動に参加し、交流を行った。(人事交流者) 松本由香氏(H24年度)、酒井久美子氏(H25年度)、西田彩子氏(H29年度)、石井恵氏(H30-R1年度)、甲斐梓氏(R3年度)
平成24～令和3年度 九州大学病院看護キャリアセンター 教育研究推進ワーキング 看護研究コース指導	九州大学病院、看護キャリアセンターにおける人材育成の教育プログラムの1つである教育研究推進WGに看護学分野の教授、准教授または講師が2名毎年委員として活動した。プログラムは、研究マインドを有した看護師の育成を目的に、全体研修および、個別指導(2年コース：1年目・基礎編、2年目・実践編)で構成され、毎年、研究の進捗を報告する成果発表会が開催された。看護学分野教員は研修の講師を務め、また、受講者(臨床看護師)1名に対し、看護学分野の教員(主に助教)1名が個々の研究指導を担当した。
平成27～令和3年度 九州大学病院臨地実習指導者研修会	看護学分野教員が、九州大学病院看護部の臨地実習指導者を対象とした研修会の講師を務め、臨地実習における看護師の指導力育成の支援を行った。
平成27・28年度 九州大学病院臨床指導者研修会	九州大学病院看護部指導者を対象としたコーチング研修会において、看護学分野教員が講師を務めた。
平成30年度 九州大学病院 新採用者・中途採用者合同研修会	九州大学病院に新規に採用された看護師を含む医療従事者・事務職に臨床倫理についての講義を看護学分野教員が実施した。
平成31年度 九州大学病院看護師研修会	クリニカルラーダーIIIを目指す看護師のための研修会：コーチングの基本的スキルを修得し、看護実践や後輩の指導に適應するための研修会において、看護学分野教員が講師を務めた。

### 3. 社会連携(協議会等)

開催日/事項	活動の概要
平成24～令和3年度 国立大学保健医療学系代表者協議会 分科会：大学院教育検討委員会 看護基礎教育検討委員会 組織検討委員会	国立大学保健医療系の学部、学科により組織されている協議会が毎年開催され、看護学分野長が毎年参加した。また、協議会における分科会として、大学院教育検討委員会、看護基礎教育検討委員会、組織検討委員会があり、それぞれの委員会にて、看護学分野教授が1名委員として活動した。毎年、看護系大学が有する、看護基礎教育、大学院教育、組織における課題を共有し、問題解決のための意見交換、方策の検討を行った。なお、本協議会の幹事は、輪番制となっており、九州大学は、大学院教育検討委員会において、R3年度は副当番校、R4年度は主当番校(担当：鳩野教授)として活動を行った。
平成24～令和3年度 日本看護系大学協議会	看護学口頭教育機関相互の連携と協力により、看護学教育の充実、発展及び学術研究の水準向上を目的とした協議会の社員総会に毎年、看護学分野分野長が参加し、協議会の活動方針や各委員会の活動計画について検討を行った。また、当協議会における各種委員会活動に会員校として協力を行った。(2022年現在登録295校)
平成24～30年度 全国保健師教育機関協議会 九州ブロック定例会および研修会	保健師教育のあり方について意見交換を行った。
平成24～令和2年度 全国保健師教育機関協議会 定時社員総会	会運営のあり方について検討を行った。
平成25～29年度 全国保健師教育機関協議会 全国スキルアップ研修会・教員研修会	保健師教育のあり方に関する検討を行った。 H25年：企画、会計を含む運営を行った。
平成24～令和3年度 (令和2・3年度WEB開催) 国立大学助産師教育専任教員会議	各大学の取り組みの現状と今後の課題について協議および意見交換を行った。
平成24～27年度 全国助産師教育協議会	前年度活動報告、当年度事業計画協議、地区別検討会等を行った。 H27年：ファーストステージ研修にて世界の母子保健と助産師活動の授業を行った。
平成24～令和3年度 (令和2・3年度WEB開催) 全国助産師教育協議会 九州・沖縄地区会議	九州・沖縄地区の加盟校による、助産師教育における課題の検討および情報交換を行った。
平成28～令和3年度 (令和3年度WEB開催) 全国助産師教育協議会 定時社員総会	総会、および教育課程別・地区別の検討会や交流を行った。 H28年：ワークショップ「先駆的教育方法の試み」で助産教育のための状況設定シミュレーション学習のデモを教員を対象に実施した。
平成24～令和2年度 (令和2年度WEB開催) 看護学教育ワークショップ	千葉大学で開催される教育ワークショップに看護学分野教員が参加した。 主なテーマ：「看護学教育における臨床と大学の連携について」 「臨床と大学をつなぐ看護学教育者の養成について」 「看護系大学教員の職能開発とキャリア支援」 「10年後を見据えた看護学教育の質改善の取り組み～臨地実習の質保障に焦点をあてて～」 「卒業時到達目標の評価をどう行い、どう活かすか」 「自大学の強みや使命を活かすCQI-自大学をとらえなおす・CQIへのエネルギーを得る」 「多様なCQI(看護教育の継続的質的改善)をささえる大学間相互支援ネットワークの力」 「看護学教育支援におけるICT活用の可能性」

開催日/事項	活動の概要
平成25・30～令和2年度 福岡県公衆衛生看護実習指導者 合同研修会	公衆衛生看護学実習に関する報告や意見交換、質の高い実習に向けた討議を行った。 R1年：副幹事校を務めた。
令和3年度(WEB開催) 日本看護系協議会国際交流推進 セミナー	国際交流推進委員会が企画された下記セミナーにて、看護分野教員が講師を務め、九州大学看護学専攻における国際交流について発表を行った。 テーマ：withコロナ時代の看護学教育における国際交流・連携の実際と課題学部教育における国際交流～九州大学の実例～(発表：橋口教授) 看護系協議会登録校より参加者：209名

### 4. 社会連携(公開講座)

開催日/事項	活動の概要
平成24年度 高校への出前講義	佐世保北高等学校 テーマ：「母性保健について」 講師：加來 東筑高等学校 テーマ：「健康と生活」 講師：川本 春日高等学校 テーマ：「医療人としての生きがい」 講師：樗木、宮園
平成25年度 高校への出前講義	東筑高等学校 テーマ：「医療倫理」 講師：中尾 春日高等学校 テーマ：「重い病気や障害のある子どもの生活を考える ～小児看護学入門～」 講師：濱田
平成26年度 高校への出前講義	東筑高等学校 テーマ：「ライフスタイルと健康」 講師：藤田(君)
平成27年度 高校への出前講義	明治学園高等学校 テーマ：「臓器移植とチーム医療」 講師：金岡
平成29年度 高校への出前講義	明善高等学校 テーマ：「看護職として輝く!!-様々な看護職 保健師・助産師・看護師-」 講師：前野
令和元年度 高校への出前講義	明善高等学校 テーマ：「今の自分・将来の自分…? - Who am I? What will I be? -」 講師：野口

### 5. 社会連携(がんプロフェッショナル養成プラン等)

開催日/事項	活動の概要
平成24年度 九州がんプロフェッショナル養成プラン	米国看護教育及び研究の第1人者であるDr. NokesとDorothy Hickey氏(ニューヨーク市立大学教授)を招聘し、特別講演及び研究指導、視察等を行った。
平成24・25年度 子どもホスピスネットワークミーティング	開催を主催した(多施設、多職種間で福岡における子どもホスピスの設立に向けての検討および病気を抱える子どもの事例検討を行った。)

## 1-1.2) 医用量子線科学分野

## 1. 分野FD

開催日 / 事項	活動の概要
該当なし	

## 2. 社会連携(人材育成)

開催日 / 事項	活動の概要
平成24年度 日本放射線治療専門放射線技師 認定機構統一講習会	開催後援
平成24年度 日本放射線技術学会セミナー	開催後援
平成24年度 日本放射線治療研究会	開催後援
平成29～令和2年度 (令和2年度 WEB 開催) 原子力規制庁人材育成事業 放射線安全のための大学間連携放射線 計測専門家・教育者育成プログラム	全国の大学の理工系学生、企業の技術者を対象として、放射線計測技術(中性子計測)に関する講義ならびに実習を行った。

## 3. 社会連携(協議会等)

開催日 / 事項	活動の概要
平成24～令和3年度 (令和2・3年度 WEB 開催) 国立大学診療放射線技師教育施設 協議会	国立大学大学院に関する研究、教育についての検討を行った。
平成24～令和3年度 (令和2・3年度 WEB 開催) 全国診療放射線技師教育施設協議会	診療放射線技師に関する教育、国家試験の内容、就職等についての検討を行った。

## 4. 社会連携(公開講座)

開催日 / 事項	活動の概要
平成26年度 市民公開講座	テーマ：「医療被ばくその他の被ばく」 大宮ソニックシティ 講師：藤淵
平成24年度 高校への出前講義	八女高等学校 テーマ：「身体の中を可視化する画像診断技術」 講師：熊澤
平成24・26・27・28・30年度 高校への出前講義	明善高等学校 テーマ：「医療における診療放射線技師の役割」 講師：杜下 テーマ：「医療における放射線利用と診療放射線技師」 講師：藤淵 テーマ：「診療放射線技師の仕事」 講師：吉田 テーマ：「保健学を学ぶ学生とその進路」 講師：田中

開催日 / 事項	活動の概要
平成29・令和元年度 高校への出前講義	明治学園高等学校 テーマ：「保健学とその進路」 講師：河窪 テーマ：「医学と工学の掛け橋:診療放射線技師」 講師：ユン

## 5. 社会連携(がんプロフェッショナル養成プラン)

開催日 / 事項	活動の概要
平成24～25年度 がんプロ講演会	テーマ：「東京大学における医学物理士」 講師：芳賀昭弘先生(東京大学) テーマ：「広島大学における医学物理士養成～県との共同プロジェクト～」 講師：小澤修一先生(広島大学) テーマ：「放射線治療品質管理を主体とした当院の医学物理士の活動」 講師：川田秀道先生(久留米大学)
平成26年度 西日本がんプロ合同 市民公開シンポジウム	テーマ：「筑波大学における医学物理学教育の現状」 講師：榮武二先生(筑波大学) テーマ：「重粒子線治療の実際と新たな展開」 講師：篠藤誠先生(佐賀 HIMAT) テーマ：「大阪大学における医学物理活動～臨床と研究の相互フィードバック～」 講師：隅田伊織先生(大阪大学) テーマ：「臨床研究型医学物理士の魅力ー「Made in Japan」を世界へー」 講師：角谷倫之先生(東北大学)
平成26～28年度 九州がんプロ講演会	臨床応用を目指した最先端医学物理研究について テーマ：「陽子線治療に関連したイメージング法の開発」 講師：山本誠一先生(名古屋大学) テーマ：「医学物理士に求められる臨床、研究、国際支援」 講師：門前一先生(近畿大学) テーマ：「臨床で役立つ研究をめざして」 講師：石川正純先生(北海道大学)
	テーマ：「Applications of Monte Carlo Simulation in Radiotherapy」 講師：Dr. Freddy Haryanto(医学物理士) (Institute of Technology Bandun Indonesia)
	テーマ：「大学における医学物理研究の展開」 講師：西尾禎治先生(広島大学) テーマ：「若手医学物理士の臨床と研究」 講師：椎木健裕先生(山口大学) テーマ：「保健学科における中性子関連の教育・研究」 講師：納富
	テーマ：「遺伝子と画像情報による診断支援予後予測,放射線感受性の判別」 講師：内山良一先生 テーマ：「次世代型全骨髄照射の実現に向けた国際共同研究」 講師：馬込大貴先生 テーマ：「診断参考レベルの概要と医療現場での活用」 講師：藤淵 テーマ：「画像支援放射線治療の新技術」 講師：有村

開催日/事項	活動の概要
平成29～令和3年度 新ニーズに対応する 九州がんプロ養成プラン講演会 先端医用量子線技術科学コース (医学物理認定機構認定) 卒後教育として学外参加も受入れ、 認定証発行	<p>テーマ：「これからの医療放射線防護のあり方」 講師：渡邊浩先生(横浜労災病院)</p> <p>テーマ：「次世代のがん放射線治療：BNCTの確立に向けた研究開発～筑波大の取り組みを中心として～」 講師：熊田博明先生(筑波大学)</p> <p>テーマ：「がんと闘うための機械学習とレディオミクスのはなし」 講師：古徳純一先生(帝京大学) 参加者：50名</p> <hr/> <p>テーマ：「放射線治療におけるターゲット位置と線量分布精度向上のためのデータ解析手法」 講師：中村光宏先生(京都大学)</p> <p>テーマ：「グリオーマの可視化技術の開発～脳腫瘍画像の読影解釈の困難性とそれが治療におよぼす影響について～」 講師：木下学先生(大阪大学)</p> <p>テーマ：「がんと組織反応に関する放射線健康影響の最新トピックス」 講師：浜田信行先生(電力中央研究所) 参加者：50名</p> <hr/> <p>テーマ：「医療Aのための次世代医用画像サイエンス」 講師：大竹義人先生(奈良先端科学技術大学院大学)</p> <hr/> <p>テーマ：「HIMACにおける炭素線治療の概要と関連する放射線防護研究について」 講師：米内俊祐先生(量子科学技術研究開発機構放射線医学総合研究所)</p> <hr/> <p>テーマ：「最先端がん検査・治療の現状と未来」 講師：麻生智彦先生(国立がん研究センター中央病院)</p> <p>テーマ：「<math>\alpha</math>線放出核種を用いた核医学治療」 講師：久保均先生(福島県立医科大学)</p> <p>テーマ：「Cardio-oncologyについて」 講師：大田英揮先生(東北大学) 参加者：50名</p> <hr/> <p>テーマ：「小児がんの放射線治療－特に陽子線治療について」 講師：副島俊典先生(兵庫粒子線医療センター附属神戸陽子線センター)</p> <p>テーマ：「画像診断領域における深層学習」 講師：木戸尚治先生(大阪大学)</p> <p>テーマ：「胸部単純X線画像の役割と期待」 講師：佐々木康夫先生(岩手県立中央病院) 参加者：50名</p> <hr/> <p>テーマ：「気体GEM検出器を用いたがん治療用重粒子線ビームの線量分布モニター技術の開発」 講師：前畑京介先生(帝京大学)</p> <p>テーマ：「Semiconductor-based Radiation detector and Imaging system」 講師：Kihyun Kim先生(高麗大学大学院)</p> <p>テーマ：「診断領域における物理的画質特性についてと放射線治療領域への活用」 講師：國友博史先生(名古屋市立大学病院) 参加者：90名</p> <hr/> <p>テーマ：「実効線量の意味合いとその適用について」 講師：甲斐倫明先生(大分県立看護科学大学)</p> <p>テーマ：「核医学update-radiotheranosticsについて」 講師：長町茂樹先生(福岡大学病院)</p> <p>テーマ：「がん診療および治療における人工知能の応用とその可能性」 講師：寺本篤司先生(藤田医科大学) 参加者：96名</p>

開催日/事項	活動の概要
	<p>テーマ：「がん診療におけるレギュラトリーサイエンス」 講師：松浦由佳先生(早稲田大学)</p> <p>テーマ：「データサイエンスとAIによるがんの画像診断の発展」 講師：村松千左子先生(滋賀大学)</p> <p>テーマ：「重粒子線がん治療における生物学的線量評価と国内外での医学物理士としての活動」 講師：深堀麻衣先生(QST) 参加者：158名</p> <hr/> <p>テーマ：「CTの最新技術はがん診療を変えられるか？」 講師：西丸英治先生(広島大学病院)</p> <p>テーマ：「Radiomicsを活用したMR画像診断と予測分析」 講師：橋渡貴司先生(大阪大学医学部附属病院)</p> <p>テーマ：「Radiomicsに基づく放射線治療支援」 講師：亀澤秀美先生(帝京大学) 参加者：167名</p>

### 1-1.3) 検査技術科学分野

#### 1. 分野FD

開催日/事項	活動の概要
平成24年度 検査技術科学分野FD	基幹教育カリキュラムについて検討した。
平成25年度 検査技術科学分野FD	文科省および厚労省へ提出するカリキュラム改正について協議した。
平成26年度 検査技術科学分野FD	3年次後期開講選択科目の分担について責任者の決定がなされた。次年度以降の分担や内容は、学外非常勤の状況を勘案して、次年度に検討を行うことを確認した。
平成27年度 検査技術科学分野FD	平成28年度入学生に対する新カリキュラムについて検討するとともに、科目の担当者を決定し、選択科目のありかたなどについて意見交換した。 教員の退職および昇任に伴い、講義・実習担当の再配置について協議した。また、実習運営体制とTAの配分方針について意見交換し、見直しを行った。
平成28年度 検査技術科学分野FD	国家試験合格率の改善のため、国家試験対策として何を実施すべきか討議した。
平成29年度 検査技術科学分野FD	学部教育における臨地実習の改善、高年次基幹教育、基幹教育科目、検査専攻専門科目、三専攻共通科目について討議した。 検査技術科学分野の国際交流、研究、FDの活用法について討議した。

## 2. 社会連携(人材育成)

開催日/事項	活動の概要
平成24年度 福岡市臨床検査技師会 一般検査部門勉強会	講義、実習 テーマ：「寄生虫卵 検出と鑑別」 講師：小島
平成25年度 鹿児島県医師会精度管理報告会	テーマ：「知っておきたい脂質検査の標準化～HDLおよびLDL-コレステロール測定法に関する最近の話題～」 講師：栢森
平成26年度 福岡県臨床検査技師会 生物化学部門研修会	テーマ：「論文を書いてみよう！」 講師：外園
平成26年度 福岡県臨床検査技師会福岡市支部主催 一般検査・細菌検査勉強会	テーマ：「寄生虫検査のコツと技～検査手技から形態まで～」 講師：小島
平成27年度 バイオイメージ・インフォマティクス ワークショップ	テーマ：「細胞核形態の定量化とパターン認識プログラムを用いた癌細胞の判別」 講師：安田
平成29年度 福岡県臨床検査技師会福岡市支部主催 一般検査・細菌検査勉強会	テーマ：「寄生虫標本観察－原虫を中心に－」 講師：小島
平成29年度 シー・アール・シーの企業内勉強会	テーマ：「糞便中に検出される寄生虫卵－形態と検出方法－」 講師：小島
平成30年度 福岡県臨床検査技師会 福岡地区臨床微生物部門勉強会	テーマ：「あなたもきっと虜になる！可愛い卵のオンパレード(実習編)」 講師：小島
平成30年度 ABBOTT BEYOND SEMINAR	テーマ：「がんゲノム医療の現在と未来－新たな免疫と腫瘍の検査にむけて」 講師：水野
令和元年度 福岡県臨床検査技師会 福岡地区臨床微生物部・臨床一般 検査部門勉強会	テーマ：「蠕虫卵の魅力に迫る！」 講師：小島
令和元年度 生化学アカデミー九州義塾	テーマ：「測定試薬の構成と適切な使用」 講師：外園
令和3年度 第22回沖縄てんかん研究会	テーマ：「長時間ビデオ脳波モニタリングの様々な側面について」 講師：重藤
令和3年度 第9回サマーてんかんセミナー	テーマ：「ビデオ症例で学ぶてんかん発作1「部分発作」」 講師：重藤
令和3年度 九州さくらてんかんセミナー	テーマ：「てんかんを診断するための基礎知識」 講師：重藤
令和3年度 山口県てんかん脳波セミナー	テーマ：「てんかん診療に役立つ脳波の知識」 講師：重藤
令和3年度 第28回周産期医療薬物療法研修会	テーマ：「女性とてんかん(周産期治療も含めて)」 講師：重藤

開催日/事項	活動の概要
令和3年度 Neurologist step up WEB seminar	テーマ：「神経内科領域で活かせる脳波検査」 講師：重藤
令和3年度 Fycompa Value Webinar Series	テーマ：「Optimal approach to insomnia in elderly epilepsy patients, Sleep and Epilepsy in the elderly」 講師：重藤

## 3. 社会連携(協議会等)

開催日/事項	活動の概要
平成24年度 日本臨床検査教育協議会 九州・沖縄ブロック会議	九州・沖縄ブロックに所属する大学・専門学校9校27名(本学分野教員13名含む)の教員が集い教育・実習についてお互いの情報交換を行った。

## 4. 社会連携(公開講座)

開催日/事項	活動の概要
平成24年度 高校への出前講義	明善高等学校 テーマ：「検査技術科学の教育内容について」 講師：杉島
平成25年度 高校への出前講義	八女高等学校 テーマ：「検査技術科学の教育内容と臨床検査について」 講師：杉島
平成27年度 高校への出前講義	明善高等学校 テーマ：「保健学科の紹介及び臨床検査と細胞診検査について」 講師：杉島
平成29年度 高校への出前講義	香住丘高等学校 テーマ：「保健学科の教育、臨床検査と病理組織細胞学について」 講師：渡邊 福岡中央高等学校 テーマ：「保健学科の教育、臨床検査と病理組織細胞学について」 講師：杉島
平成30年度 高校への出前講義	明治学園高等学校 テーマ：「病気発見のプロフェッショナル」 講師：栗崎
平成29年度 栄養学術研修会・長崎栄養改善学会 および長崎県公開講座	テーマ：「知っておきたい食べ物に潜む寄生虫」 講師：小島
平成30年度 天神クローバー会	テーマ：「糖尿病の新しい治療の現状～最新の知見を取り入れた糖尿病治療への取り組み方～」 講師：勝田
令和元年度 サイエンスカフェ@うきは	テーマ：「私たちの身近に潜む寄生虫～あなどれない、されど愛しい虫たちの紹介から」 講師：小島 テーマ：「免疫とは？免疫のふしぎな性質に迫る！」 講師：栗崎
令和元年度 九州大学病院糖尿病市民公開講座	テーマ：「令和時代の糖尿病に向き合う」 講師：勝田
令和3年度 熊本大学主催フロー型アニサキス 殺虫装置の開発会議	テーマ：「見て、聞いて、知ってアニサキスという生物」 講師：小島



## 1-2) 学生の現況

## 1. 国家試験合格者数

年度/年/期	看護師	保健師	助産師	診療放射線技師	臨床検査技師
平成24年度 2012年	71	71	7	34	27
平成25年度 2013年	63	63	6	32	35
平成26年度 2014年	66	68	6	34	32
平成27年度 2015年	71	10	5	30	24
平成28年度 2016年	68	10	4	32	27
平成29年度 2017年	64	10	2	26	34
平成30年度 2018年	69	10	8 ※	35	25
令和元年度 2019年	69	10	6	24	23
令和2年度 2020年	68	10	7	36	33
令和3年度 2021年	70	10	7	33	30

※平成30年度以降は、大学院修士課程・助産学コースの受験者数

## 2. 各種資格合格者数

年度/年/期	第1種放射線取扱主任者	医学物理士	年度/年/期	細胞検査士 ※
平成15年度 2003年			平成15年度 2003年(第1期生)	3
平成16年度 2004年			平成16年度 2004年(第2期生)	2
平成17年度 2005年	7		平成17年度 2005年(第3期生)	1
平成18年度 2006年	13		平成18年度 2006年(第4期生)	3
平成19年度 2007年	25		平成19年度 2007年(第5期生)	2
平成20年度 2008年	18		平成20年度 2008年(第6期生)	2
平成21年度 2009年	26		平成21年度 2009年(第7期生)	1
平成22年度 2010年	18		平成22年度 2010年(第8期生)	2
平成23年度 2011年	24	5	平成23年度 2011年(第9期生)	2
平成24年度 2012年	22	5	平成24年度 2012年(第10期生)	1
平成25年度 2013年	36	4	平成25年度 2013年(第11期生)	1
平成26年度 2014年	26	4	平成26年度 2014年(第12期生)	1
平成27年度 2015年	15	5	平成27年度 2015年(第13期生)	0
平成28年度 2016年	17	7	平成28年度 2016年(第14期生)	0
平成29年度 2017年	16	3	平成29年度 2017年(第15期生)	
平成30年度 2018年	17	3	平成30年度 2018年(第16期生)	
令和元年度 2019年	10	3	令和元年度 2019年(第17期生)	
令和2年度 2020年	26	1	令和2年度 2020年(第18期生)	
令和3年度 2021年	32	3	令和3年度 2021年(第19期生)	

※備考 ・細胞検査士は臨床経験が必要で卒業後最短でも2年後の取得  
・九大の学部卒業生のみ、他大学から入学した院生は含まず

## 3. 学位取得者数

年度/年/期	看護学修士	看護学博士	医用量子線修士	医用量子線博士	検査科学修士	検査科学博士
平成24年度 2012年	9	4	12	3	6	0
平成25年度 2013年	4	4	12	1	11	2
平成26年度 2014年	6	5	15	3	9	2
平成27年度 2015年	6	2	16	5	10	2
平成28年度 2016年	6	5	16	4	7	0
平成29年度 2017年	13	7	12	5	14	2
平成30年度 2018年	16	0	13	5	8	2
令和元年度 2019年	13	7	13	7	5	3
令和2年度 2020年	14	7	11	3	6	0
令和3年度 2021年	8	1	13	3	12	0

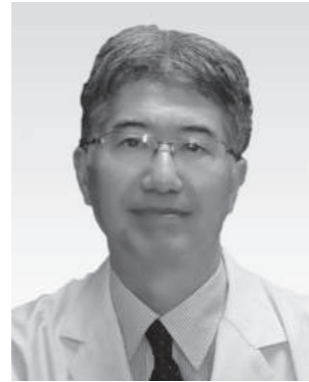
## 4. 英文誌掲載論文数

年度/年/期	看護学教員主筆	看護学学生主筆	医用量子線教員主筆	医用量子線学生主筆	検査科学教員主筆	検査科学学生主筆
平成24年度 2012年	1	1	1	12	2	0
平成25年度 2013年	3	0	4	12	1	2
平成26年度 2014年	8	6	7	13	0	1
平成27年度 2015年	7	6	5	13	1	3
平成28年度 2016年	3	11	4	14	3	2
平成29年度 2017年	3	9	4	15	1	4
平成30年度 2018年	7	4	7	13	2	3
令和元年度 2019年	7	8	5	17	1	2
令和2年度 2020年	5	8	3	15	1	0
令和3年度 2021年	6	4	11	11	3	0

## 保健学科創立20周年を迎えて

九州大学大学院医学研究院保健学部門 部門長  
保健学科長

藪内 英剛



九州大学医学部保健学科は、2022年10月で創立20周年を迎えました。2002年10月に前身の九州大学医療技術短期大学部を改組して4年制大学として設置され、2007年に九州大学大学院医学系学府保健学専攻修士課程を、2009年に同博士後期課程を、それぞれ設置し大学院大学の体制となり、2015年には同修士課程助産学コースも設置しています。設立後の10年間で教育・研究体制が整備され、その後の10年間は研究・国際交流の発展の時期となりました。これまで歴代の医学研究院長、病院長、保健学科教員・事務職員の皆様、関係の先生方のご努力に感謝申し上げます。

修士課程では、アジア保健学コースやがんプロフェッショナル教育コースを併設し、それぞれアジア諸国からの留学生受け入れ、医学物理士の教育施設として認定されています。アジア保健学コースは、これまでアジア諸国（中国、韓国、ベトナム、タイ、シリア、インドネシア、バングラデシュ、トルコ）から20名以上の留学生を受け入れてきました。彼らの多くは卒業後に研究者や教育者として活躍しており、本学との共同研究などに発展しています。がんプロフェッショナル教育コースでは、医学物理士や細胞検査士の教育コースを併設しており、これらはがん診療病院には必須とされる資格で、これまでに

多数の医学物理士・細胞検査士を輩出し、高度専門医療職の育成に貢献しています。大学院設置以降で、修士426名、博士122名を輩出し、特に博士後期課程では全国から社会人大学院生を受け入れています。また、研究面でも教員・院生の英文筆頭論文もこの10年間で351編を数え、飛躍的に増加しています。

社会から大学に対して、保健・医療・福祉における様々な課題に対応できる高度専門医療職の人材育成が求められており、特に我が国が抱える超高齢化・少子化などの問題にも対応できる高度な専門医療職を今後も育成してまいりたいと思います。全国や学内の公募プロジェクト等も多数獲得しており、競争的外部資金獲得により教員を雇用して教育の質を維持しております。

これからも保健学部門は、世界と対峙する教育と研究を目標として社会の要請に貢献できる教育研究拠点として、今後も努力してまいります。関係の先生方にはご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

## 保健学科とともに歩んだ20年

前九州大学大学院医学研究院保健学部門 部門長  
医用量子線科学分野 教授

佐々木 雅之



平成15年4月、私は保健学科に1期生の入学と同時に着任しました。学生も教員も新しい学科のスタート、これから広がる明るい未来に向けて活気あふれる日々の始まりでした。

着任と同時に1期生の担任となり、まずは一人一人の顔と名前を覚えることから始めました。一年生は全学教育科目のために主に六本松で、専門課程に進むと馬出キャンパスで2年生、3年生、4年生と進学し、初めて実施されるカリキュラムに私も学生とともに苦労しました。特に、4年生での研究室配属、卒業研究は大きな課題でした。学生のレベルも考えない気まぐれな研究課題に学生もよくこたえ、一流英文誌に投稿できるレベルの成果をあげたものも少なくありませんでした。

保健学科の学年進行と並行して大学院設置の準備が始まり、私も設置準備委員として会議と資料作りに追われました。カリキュラム作り、学位審査の方法など、何度も文部科学省と書類のやり取りを行い、特にwebシステムが未熟であった当時は、社会人大学院生の受け入れ態勢や教育方法が課題でした。皆の努力で何とか設置にこぎつけると、学生は修士課程でも博士課程並みの研究課題に取り組み、国際学会の発表、学会での受賞、英文論文作成などを当たり前のよう達成していきました。すでに多くの卒業生

が、医療のリーダーとして、一流の研究者、企業の管理職として活躍しています。大学生と大学院生の成長には驚きと感激の連続で、人材育成の喜びと楽しさを学びました。

私は幸運にも保健学科の誕生から成長の20年を経験でき、この間、部門長として2年、副部門長や分野長として6年間など運営にも携わらせていただきました。着任時は短期大学の雰囲気色が濃く残っていましたが、20年間で総合大学の一部局としての体制が整ってきました。研究を行うこと、研究成果を世界に発信することが普通になりました。また、国際交流の重要性も浸透し、留学生の受け入れと派遣も活発になってきました。

次の20年は医学研究院保健学部門・医学系学府保健学専攻・医学部保健学科が世界の保健学のリーダーとしてますます発展し飛躍することを祈念しています。

## 保健学科の20周年を祝して

九州大学 総長  
石橋 達朗



医学部保健学科創立20周年おめでとうございます。この間、保健学領域の発展にご尽力された関係者の皆様のご努力に敬意を表します。

医学部保健学科は、2002年に行われた医療技術短期大学の改組により誕生した学科ですが、前身は1903年の福岡医科大学附属医院看護婦養成科で、さらに1895年の県立福岡病院看護婦養成所の設置による看護婦見習生教育の開始まで遡ることができるほど、長い歴史と伝統を有しています。

大学院の教育は、2007年設置の大学院医学系学府保健学専攻（修士課程）からはじまり、2009年には博士後期課程を、さらに2015年には修士課程助産コースを設置し、保健学領域の教育者・研究者や、指導的実践者の育成の役割を担っています。また、これらの大学院には、アジア保健学コース（修士課程）、保健学国際コース（博士後期課程）を併設し、主にアジア諸国の外国人留学生を受け入れて教育を行うなど、保健学領域において国際的なリーダーとなる医療人や、研究者の輩出にも力を入れています。

本学は、2021年11月に今後10年間の大学の方向性、方針を示す「Kyushu University VISION 2030」を策定・公表し、目指す姿として「総合知で社会変革を牽引する大学」を掲げ、その実現に向けて社会的課題解決とDX（Digital

Transformation）の推進に取り組み、社会変革に貢献することを宣言しています。特に本学の強みを生かして取り組むべき社会的課題の1つに「医療・健康」を挙げています。

その背景には、世界に例のないスピードで進展する我が国の少子高齢化への対応と、健康長寿社会の実現につながる保健・医療・福祉分野の大学の取組に対する期待の高まりがあります。

このような社会からの期待に対して、医学部保健学科がこれまで蓄積してきた優れた知見を活かして、予防医学や老年医学などに対応できる高度専門人材の育成をはじめ、現代社会が抱える課題の解決に寄与する取組を推進し、その成果が社会に還元されていくことを祈念して、お祝いの言葉といたします。

## 九州大学医学部保健学科設置 20周年をお祝いして

九州大学病院 病院長  
中村 雅史



九州大学医学部保健学科が創立20周年の節目を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。この間、優れた医療人の教育にご尽力され、育成された多くの優秀な人材を通じて九州大学病院の発展に貢献してこられた保健学科教職員の皆様に御礼を申し上げます。この度の保健学科の節目にあたり、保健学科と九州大学病院の関係について思うところを寄稿したいと思います。

九州大学病院は、福岡地区の病床数1,267床を有するわが国最大規模の大学病院であり、Newsweek誌のThe World Hospital 2021では国内5位以内、世界で100位内にランキングされている、名実ともに日本を代表する病院であり、西日本における高度医療の中核拠点としての役割を果たしています。ところで、最先端医療を実践する一方で、優れた医療人を育成することも当院の重要な任務の一つであり、病院の基本方針にも全人的医療を実践する医療人の養成が標榜されています。この方針に則って、保健学科からも看護学、放射線技術科学、検査技術科学の臨床実習生を毎年受け入れています。その多くの卒業生が、国家資格を取得後に、当院で活躍されています。保健学科と九大病院の間では、上記で述べた以外にも多くの交流や共同作業が行われています。病院の各診療科、看護

部、放射線部、検査部と保健学科の間では継続的に多数の共同研究が行われており、また、多くの教員の先生方が当院で臨床従事をされています。今後も、このような多面的な交流を積極的に進めて、病院と保健学科双方の臨床、教育、研究の発展に寄与したい所存です。

近年、医療は急速に高度化してきており、専門的な知識とスキルを有する多職種からなる先端医療チームの必要性が増大してきています。高度な医療技術と知識を備えた高い専門性をもつ医療人材の育成ということに関して、保健学科に求められる役割は極めて大きいものがあります。また、開発途上国などへのアウトリーチ事業等の格差是正事業が大学評価の重要因子となっていますが、保健学科には、この10年間でアジア保健学コース（修士課程）、保健学国際コース（博士後期課程）が増設されており、これらの先進的な教育システムが九大の外部評価果たす役割も期待されます。

九州大学医学部保健学科が創立20周年を契機に、今後も医療現場の高度な実践者、教育者、研究者、行政職や医療系企業で活躍できる優れた人材を輩出し、益々発展されますよう祈念して、お祝いの言葉とさせていただきます。

## 九州大学医学部保健学科 20周年を迎えて

九州大学 医学研究院長  
北園 孝成



九州大学医学部保健学科は平成14年に設置され、令和4年10月に20周年を迎えました。平成19年には修士課程、平成21年には博士後期課程も設置され、看護師、保健師、助産師、診療放射線技師、臨床検査技師の育成を行うとともに、保健学の発展と人材育成のために日々たゆまぬ努力を続けてきました。

看護学分野では、橋口暢子分野長を中心に教授7名、准教授2名、講師9名、助教15名の教員がこれからの医療を担う看護職の育成に取り組んでいます。本分野は看護師教育課程を中心とした統合基礎看護学講座と保健師・助産師の育成を行う広域生涯看護学講座からなり、国家試験においても毎年ほぼ100%の合格率を維持しています。大学院では看護学研究のスペシャリストの育成に取り組み、大学院修了者は急増する看護系大学の教員としての活躍が期待されています。7名の教授を中心に研究室を運営し、人を対象とする観察研究を中心に看護研究を展開しています。

医用量子線科学分野では、有村秀孝分野長を中心に教授5名、准教授4名、講師1名、助教2名の体制で教育と研究に取り組んでいます。本分野は基礎放射線科学講座と医用放射線科学講座からなり、それぞれ放射線防護・医学物理、撮影技術・画像解析・放射線治療技術を担当し

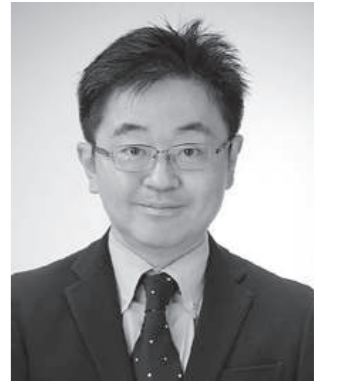
ています。学部学生は卒業後に診療放射線技師国家試験を受験しますが、合格率は例年90%以上を維持しています。卒業後は九州大学病院をはじめ基幹病院に就職し、また、1/3の学生が修士課程に進学します。大学院ではアジア諸国からの留学生を受け入れており、医学物理士の教育施設としても認定されています。さらに最新の画像診断技術や放射線治療技術の最適化、AIを用いたがん医療研究など最先端の研究も展開しています。

検査技術科学分野では、内海健分野長を中心に教授4名、講師6名、助教4名の体制で生体情報学講座と病態情報学講座において教育と研究を行っています。卒業生の多くは九州大学病院や基幹病院に就職しますが、毎年10名ほどの学生が大学院に進学し、専門性の高い検査技師や研究者、教育者を目指します。さらに4名の教授を中心に検査法、検査技術、検査機器の情報処理、感染症、疾病の病態解析のための検査技術・診断法の開発に関する研究を行っています。

九州大学医学部保健学科は世界で活躍する医療人の育成、さらには医学と医療のさらなる発展のために貢献できるように努力してまいります。さらなるご支援を賜りますようお願いいたします。

## 20周年、おめでとうございます。

九州大学大学院医学研究院臨床放射線科学分野 教授  
石神 康生



九州大学医学部保健学科が設立20周年に際して、寄稿文を書かせて頂くことになりました。何から書き始めたらよいか迷いましたので、思い出から書き始めることにいたします。

私が九州大学に入学したのは平成元年です。保健学科設立よりも前のことになります。当時は医療技術短期大学を「医短」と呼んでいました。医学部空手部に入学し、週3日は医短の体育館1階奥の武道場に通っていました。汗臭い道場で男子空手部員達が着替えをするので、隣で練習する女子合気道部員からは嫌がられていました。医短の前で女子マネージャー募集のチラシを配ったのに誰一人として問い合わせがないというほろ苦い思い出もあります。校舎、体育館、グラウンドが隣接し、病院地区の中でもっとも学校らしい場所である医短体育館周辺での私の思い出は男子校の延長のようなものばかりです。

大学を卒業して放射線科に入局しました。入局後は医短体育館には足が遠のきましたが、学生時代と比べものにならないくらいコメディカルの皆様との交流が広がりました。特に我々放射線科医の仕事は、放射線技師さんがいなければ成り立ちません。診療を通して放射線部の技師さん達には色々と教えて頂きました。また、その当時から医局の錚々たる先生方が医療技術短期大学、そして保健学科にご異動されていました。放射線科と放射線部の技師さん達との強い繋がりは医療技術短期大学から保健学科となっ

た現在まで学生教育の頃から培われています。

今年には保健学科設立20周年という節目ですが、放射線技師さん達の研究のアクティビティが高くなっていることを年々実感しております。現場で一緒に働く放射線技師さん達が我々放射線科医と定期的にリサーチミーティングを行い、英語原著論文を次々と発表しています。保健学科の先生方のご指導のおかげだと思います。

タスクシフトという言葉が現場でよく聞かれるようになり、放射線技師さんの教育カリキュラムも変わっていきます。しかしながら、優れたプロフェッショナル、良き医療人を育成したいという根幹は変わりません。知識、技術、コミュニケーション能力はいずれも良き医療人に必要です。それに加え、医療の現場で感じた疑問を科学的に検証するために臨床研究が行われます。放射線科では画像を基にした診断・治療が行われますが、画像の研究でも医療人としてのハートを忘れないように意識し、単なる数合わせに終わらないようにしなくてはならないと思います。

保健学科の先生方、放射線技師さん達、そして我々放射線科医が三つ巴で病院実習を含む学生教育、大学院生教育、研究で連携している現在の素晴らしい環境は、保健学科設立の成果のひとつだと思います。設立30周年の時も私は在任している予定です。保健学科の更なるご発展を祈念しております。今後ともどうかよろしくお願い致します。

## 20周年に寄せて

九州大学病院 副病院長、看護部長、看護キャリアセンター長  
濱田 正美



保健学科開設20周年おめでとうございます。開設から20年、九州大学の高等教育・研究機関としての実績を示されるとともに、学部から大学院に至るまで、多くの優秀な人材を世に出されてきました。あらためて、教員の先生方はじめ関係者の皆様には、20周年を迎えてお慶び申し上げます。

この間、特に10周年から20周年にかけての10年間を振り返りますと、まずは保健学科から多くの卒業生が九州大学病院に入職して下さったことです。国立大学42大学のなかで九州大学病院は、当該大学からの就職者数が常にトップであり、これは学部から臨床へ切れ目ない継続教育への取り組みを、学部の先生方とともに推進してきたことが大きく、感謝申し上げる次第です。

次に、平成28年11月に開設した九州大学病院「看護キャリアセンター」の運営・活動です。看護部と保健学科が連携・協働し、専門職業人としての看護職のキャリア開発や生涯学習を支援し、地域全体の看護の質向上に貢献することを目的として開設した看護キャリアセンターは運営の柱を4つ挙げております。その1つが、「基本的看護実践能力育成」です。活動内容は、看護学生の臨地実習教育の充実を図るための実習指導要項開発から定期的な改正、実習指導者育成プ

ログラムの作成から実施であり、保健学科の先生方の協力のもと推進してきました。このことが、当該大学からの就職者数トップに繋がっており成果と言えます。さらに、教育担当副看護師長が、大学から「保健学協力講師」として称号付与され、1～2年間を任期として人事交流を行っています。病院と大学間の連携・教育を深め、学部教育と卒後の看護実践との乖離解消に繋がる取り組みの一つとなっています。

これも保健学科との良好な関係構築があったことと感謝申し上げます。

さらに今後は、臨床看護研究推進に向けて、看護部と保健学科との新連携についても協力体制を培っていききたいと思います。

最後になりますが、保健学科の更なる飛躍と益々のご活躍を祈念いたしております。

## 医学部保健学科 創立20周年に寄せて

九州大学病院 診療放射線技師長  
加藤 豊幸



九州大学医学部保健学科創立20周年、誠にありがとうございます。心よりお祝い申し上げます。

このような特別な節目を共に迎えられたことを大変嬉しく思います。

私は、前身の医療技術短期大学の卒業生ですが、現在との大きな違いは卒業研究の有無です。特に大学病院では臨床・研究・教育の3本柱のバランスが重要ですが、大学時代に多くの国内外の文献を読破し、文献的検討を行い、実験などの研究手法を学び、論文化するという、研究の進め方や科学的思考のプロセスを学んだ上で就職できることは、これからの医療技術の発展に大きく寄与してくれるものと期待しております。

大学化のもう一つの大きな効果は就職先の多様化が挙げられます。医療機器メーカーや保険会社、製薬会社、スポーツ関係など様々な分野への進出が進み、多方面での活躍を耳にすることが多くなり、大変誇らしく感じております。

超高齢者社会を迎え、医療も変革の時期を迎えている中で、国民が求める「グローバルな視点を持ち、安全で質の高い医療技術を提供する医療人」を育成するためには、今まで以上に充実した学校教育と実践的な臨地実習との融合が不可欠であります。今後より実践的な臨地実習

が提供できるよう大学と病院が連携していくことは大変重要であり、微力ながら双方の懸け橋になればと思っております。

最後になりますが、さらに10年後の30周年に向けて卒業生、修了生のますますのご活躍と医学部保健学科のさらなるご発展を祈念いたします。

## 九州大学医学部保健学科の 20周年を祝して、そして更なる発展を 祈って

前九州大学病院 検査部長  
康 東天



私がまだ九州大学病院の検査部副部長の頃に、前身の九州大学医療短期大学部は医学部保健学科として3年制の短期大学から4年制の大学教育機関として再出発しました。ここに20周年の節目の年を迎え、これまでの教育と研究の歩みに心から敬意とお祝いを申し上げます。

私が保健学科と関わりを実質的に持つようになったのは部長になってからで、それから2022年の春に定年退職をするまでのほぼ15年間、ほとんどが検査技術科学専攻に限られますが保健学科とは長い付き合いとなりました。検査部長となったとき、私はいくつかのミッションを教育と研究に関して自分に課しましたが、そのうちの大きな柱の一つは、医療と医学の両面における臨床検査技師の地位の向上でした。保健学科の検査技術科学専攻と病院検査部（および医学科臨床検査医学講座）は臨床検査技師の教育と研究において両輪であるべきで、この両者が密接に協力し合っこそ、臨床検査技師を目指す検査技術科学専攻の学生にとっても、そして検査部で臨床検査の実務に従事する検査技師にとっても最も幸せで実りある体制であると確信していました。

最初のころは両者の連携は必ずしも深いものとはなりませんでした。少しずつお互いの理解が深まり、私が退任する数年前からは検査部の検査技師が保健学科の常勤のスタッフとして

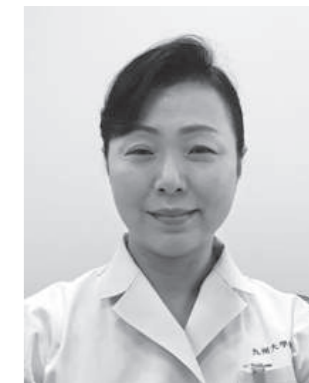
2-3年おきに交代しながら臨床検査現場の最新の知識を持って教育する体制がようやく動き出しました。これが継続拡大するためには保健学科の先生方の理解が欠かせないのはもちろん、検査部の検査技師の意識改革も必須です。現役の検査技師が一定期間プロフェッショナルな教育者そして研究者として過ごすことの意義について、いまだに十分に検査技師の間に浸透させることができていないのは私の努力と熱意が足りないせいであると大いに反省しているところです。今後も両者の間で実質的なスタッフの交流がさらに深まることを心から願っています。

時期をおおよそ同じくして、臨床検査医学分野/検査部が保健学科の修士課程、博士課程学生の研究指導をする例も増えだしました。最新の解析技術を使い研究対象も幅広いこともあり、基礎医学の観点からも、臨床の観点からも保健学科学生の研究対象の選択の幅を広げ、さらに保健学科外での研究経験は保健学科に帰っても新たな視点を与える良い契機になったと信じています。

このように両者が刺激しあい両輪として機能することで保健学科臨床検査技術専攻が次の30周年には臨床検査技師の教育と研究において臨床検査医学領域で日本だけではなく世界をリードする存在になることを、今は学外からですが信じ祈っています。

## 優れた医療人育成のために

九州大学病院検査部 技師長  
堀田 多恵子



20周年おめでとうございます。

臨地実習を担当している検査部を代表して、保健学科の皆様にご心よりお祝い申し上げます。

保健学科の学生さんたちにとって最も身近な医療機関が私達だと思います。多くの学生さんにとって『初めての医療現場』であることを考えると毎年、身が引き締まる思いです。学んできたことの実践的な振り返りと同時に、もっと学びたい、もっと研究したいという強い動機づけになることを毎年、期待しています。

2020年3月以降のSARS-CoV-2による世界的なパンデミックは医療現場だけでなく、教育現場や臨地実習にも影響がありました。コロナ禍の臨地実習は生理機能検査などで制限がありました。これらの制限の中でも検査部のスタッフは考え、より良い臨地実習にするために工夫していました。より質の高い臨床検査とするためのKAIZENを臨地実習においても実践してくれました。COVID-19は膨大なSARS-CoV-2 PCR検査と鼻咽頭ぬぐいの検体採取などの新たな業務を検査部に持ち込みましたが、同時に、変化する医療への対応・新たな要請にも応えうる知識と実践力が十分にあることを明らかにしました。日頃から業務以外にも研究や社会的な役割を果たしてきたことが幅広い視野での課題解決やコミュニケーションによる協働にリンクしたと

考えます。

検査部にとってスタッフ一人ひとりが人財です。一人ひとりの成長がそのまま検査部の成長となります。NGS、質量分析やAIなど新しいテクノロジーが臨床検査の場に浸透しつつあります。その可能性にワクワクします。保健学科20周年の節目に、広く深い見識と、明日の臨床検査を創造できる優れた医療人を育成するために、保健学科の先生方や学生さんと対話を持つこと、教育の場と臨床の場との距離を縮めること、相互に活性化することに大いに期待します。

## 看護学分野の20年の歩みとこれから

九州大学大学院医学研究院保健学部看護学分野 分野長、教授  
橋口 暢子



私が九州大学に准教授として着任したのは、保健学科が10周年を迎え、ちょうど10周年記念誌が刊行された年でした。その5年後教授に昇進し、今年分野長に就任致しました。私のこの10年間のキャリアは、保健学科の歩みに育てられ、そして、多くの先生方にご指導いただいたおかげであり、この場をお借りして感謝申し上げます。

看護学分野の教育におけるこの10年間の最も大きな実績は、2015年に修士課程、助産学コースが設置されたことです。設置当初は、学部での育成と並行となり、担当の先生方は大変苦労されたと思いますが、これまでに、37名の修了生を輩出することができ、質の高い助産学教育の基盤を構築することができました。

国際交流も、飛躍的に活動の幅を広げることができ、高雄医学大学を始め、マヒドン大学、香港大学と学術協定校を拡大し、本学学生の派遣、留学生受け入れを行いました。そして、フィンランドのオウル大学とも、研究交流を開始し、大学院生の研究指導においても、グローバルな視点での教育が可能となりました。JASSOやSGUなど、国や大学から外部資金の獲得にも尽力し、学内競争的資金（NEEP）の獲得により、国際交流をより促進することができたのも大きな実績と言えます。COVID-19のパンデミックに

より、その交流は一旦足踏み状態ではありますが、交流再開の際は、オンラインと併用しながら、そのさらなる充実化を果たしていきたいと思えます。

ハード面では、保健学科本館の改修がありました。改修の際には、研究室や実習室の引っ越し先探しや、実習室のレイアウトや設備など我々教員の要望をできるだけ実現できるようにと多くの方にご尽力頂きました。おかげで、新しく設備も整った看護学実習室で、より実践に即した学内実習を実施することができるようになりました。

人事ポイントの関係により、教員の確保の面において厳しい状況は続いています。しかし、20周年を迎えたこの時、これから先、看護学分野がさらなる飛躍を果たすための第一歩をどのように踏み出すか、非常に重要な岐路に立っているのも事実です。看護系大学が増加の一途をたどっていることを考えると、これまでに培われた九州大学看護学分野が有する強みを生かし、そのプレゼンスを日本、そして世界に示さなければなりません。この目標を達成するための戦略を立て、その期待に応えたいと思えます。そして、次の30周年記念誌にその功績を示すことができるよう尽力していきたいと思えます。

## 20周年記念によせて

前九州大学大学院医学研究院保健学部看護学分野 分野長、教授  
藤田 君支



九州大学医学部保健学科開設20周年ということで、大学設置にご尽力された皆様におかれましては、とても感慨深いことと拝察いたします。私は2014年4月に赴任いたしました。当時は保健学科本館の改修工事が開始されており、本館前の桜の木だけが卒業20年を経ても変わらない景色を残していました。

現在の看護学分野は、看護師教育課程を中心とした統合基礎看護学講座と保健師・助産師の育成を行う広域生涯看護学講座の二つの組織から成ります。教育や運営は講座を超えて相互に連携し、看護師・保健師・助産師（大学院）の三つの国家資格において、毎年ほぼ100%の合格率を維持しています。コロナ禍では、ICTを活用した遠隔教育と対面授業を併用し、臨地実習も九州大学病院をはじめとする関連施設のご協力のもと、様々な工夫を行いながら継続してきました。実習の補完には生体モデルによるリアリティのあるシミュレーション演習を強化しました。実習場面を想定した演習シナリオを作成し、ロールプレイによって学生の臨床判断を即時に確認できますので、術後管理や感染症ケアなど看護技術を安全にトレーニングする学習ツールとして今後も活用を拡げるつもりです。

国際交流においては、パンデミック以降の学生や教員の海外渡航は激減し、保健学国際フォー

ラムもオンライン開催となりました。対面でのコミュニケーションには叶いませんが、遠隔での国際交流は時間や旅費負担がなく、誰でも参加できる利点もあります。オンラインの利便性と対面での深い交流を併用して、グローバル化の推進を図っていかねばと考えています。

研究においては、文科省科学研究費の昨年の分野内教員の採択率は70%を超え、大学院生の国際誌への発表も増えてきました。優秀な人材が集まる魅力的な大学として、看護実践のエビデンスとなる研究を蓄積し、九州大学の看護学をブランディングする必要性を感じています。微力ではありますが保健学科の発展に寄与すべく務める所存ですので、皆様におかれましては、今後ともお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

## 医用量子線科学分野の20年

九州大学大学院医学研究院保健学部門医用量子線科学分野 分野長、教授  
有村 秀孝



医学部保健学科が2002年にスタートし、2007年に大学院修士課程、2009年に博士課程が設置され、大学院の教育と研究を成熟させ、教育設備や実践型教育の強化、国際化を中心に推進してきました。

この10年の目標は、先の10年の成果を活かし、放射線技術、医学物理を含む医用量子線科学分野の大学院教育と研究を発展させることでした。2012年医学物理士認定機構から「医学物理士・放射線治療品質管理士養成コース」の認定（継続更新中）を受けました。これに伴い、がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン（2012年度～2016年度）、多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材（がんプロ）」養成プラン（2017年度～2021年度）の支援を受け、医学物理士教育を進めてきました。さらに、2014年「実践能力強化型チーム医療加速プログラム」（プロジェクトリーダー：杜下淳次教授）（2014年度～2019年度）に採択され、チーム医療を促進するために、学部教育、医療人技術向上教育、実習指導者教育のプログラムを策定し実施しました。また、2021年度から「実践的な課題解決能力を持つ高度放射線防護人材育成プログラム」（事業統括：藤淵俊王教授）（2025年度まで）に採択され、放射線防護に関する高度で実践的な教育を推進し、放射線に関する説明能力、研究能力、課題

解決能力を備えた放射線規制の高度な役割を担う人材を輩出する予定です。

2007年以降、大学院生は、教員と共に創造的に基礎と臨床研究を行い、後輩の指導、国際学会発表（年平均約30回）、英語論文発表（年平均約18本）等の素晴らしい実績を残し、臨床、企業、教育などの分野で活躍しています（修士修了者数：167名、博士号取得者数：40名）。

2007年以降、国際関係の実績は短期受入留学生32名、修士博士課程入学の正規留学生はそれぞれ13名と8名となり、修了者は国内外で活躍しています。今後もさらに多様な人材育成と日本人学生の国際的視点の育成を目的とし、アジアの大学を中心に交流を続け、留学生を積極的に受け入れたいと思います。

今後も我々教員が10年先の医用量子線科学分野の未来を考え、更なる高みを目指したビジョンを持ち、高度な教育と独創的な研究へ邁進したいと思います。

## 20年を振り返ってみて

元九州大学大学院医学研究院保健学部門医用量子線科学分野 分野長、教授  
杜下 淳次



九州大学医療短期大学部を発展的に医学部保健学科に改組してから20年の年月が流れ、学部教育と大学院教育を担える保健学部門となりました。一連の変化を成し遂げられたのも、関わりをもってくださった多くの大学人と、変革に理解を示してくださった医学研究院の先生方ならびに九州大学総長と執行部の方々のご理解とご助言のお陰です。

20年間で合計2242名の学部生（看護学専攻1126名、放射線技術科学専攻552名、検査技術科学専攻564名）と404名の修士課程修了者（看護分野84名、医用量子線分野167名、検査技術科学分野117名、助産学コース36名）、そして博士後期課程修了者97名（看護学教育者・研究者コース40名、医療技術系教育者・研究者コース57名）を輩出しました。大学院生のなかには、社会人大学院生と海外からの留学生が含まれています。留学生や社会人大学院生にとって学習と研究を継続することは想像以上に困難であったと思います。しかし、将来の自分を思い描き、入学時の決意を忘れずに計り知れない努力の後に手にした博士（保健学）博士（看護学）または修士（保健学）修士（看護学）の学位記を手にしたとき、在学中の苦しさを忘れるくらいに大きな喜びとなったことが学位記授与式での言葉や表情から窺い知ることが出来ます。

学部生や大学院生は、在学期間中に卒業研究や特別研究を通じて、指導教員や国内外の研究

者との関係から自分の立ち位置や、多くの気づきがあったことでしょう。卒業前の口頭試験では、慎重に言葉を選んでプレゼンテーションを行い、質問にも冷静に堂々と対応する姿勢を目の当たりする度に、学生時代に得たことが如何に多く、大きく成長してくれことを感じます。このような場面に出くわすと教員として何物にも変え難い嬉しさが込み上げてきます。それと同時に、彼らが将来活躍することを確信する瞬間でもあります。

学部卒業時に国家資格を取得して大学院へ進学した学生は、より深く幅広い知識とスキルを習得し、本格的な研究活動も経験します。専攻によって少し状況は異なりますが、学部生の約1/3近くは大学院修士課程への進学を希望し、進学後は生き活きとした学生生活を楽しんでいます。

医療技術は止まることなく進歩を続けています。最近では保健学の領域でも人工知能を活用する動きが活発です。今後の進歩に追従できる人として在り続けるには、大学で学んだ知識とスキルに加えて、卒業後にそれらの更新を続け、さらに、日常業務における各専門分野の課題に対しては、主体性を持って考え、その解決策を発信する行動力が試されることでしょう。このような観点から、九州大学で保健学を学んだ学生が、未来の医療現場や教育現場を牽引するキーパーソンとなることを信じております。



## 九州大学医学部保健学科 開設20周年を迎えて

九州大学大学院医学研究院保健学部門検査技術科学分野 分野長、教授  
**内海 健**



保健学科の開設20周年に寄せてお礼の言葉を申し上げます。

私は2019年（開学17年目）に保健学科検査技術科の教授として赴任してきました。前職は九州大学病院検査部の副部長をしていた関係上、保健学科の先生方には、臨地実習、卒業生の入職等で大変お世話になっていました。私は1995年に九州大学医学部生化学講座に助教として赴任して以来、春は桜が満開の保健学科を眺めてきました。当時は医療技術短期大学部 通称医技短と呼ばれていたかと思います。2003年に4年課程の保健学科が開設され大きく発展するだろうと思っていました。私事です馬出キャンパス医局対抗テニス大会に保健学科の永淵先生に誘われ、中野先生、東田先生、丸山先生等と出場し優勝したことがいい思い出になっています。また、学会、セミナー等の関係から永淵先生、梅村先生とは交流させていただき感謝している次第です。2007年に検査部に赴任してから検査技師さんと業務、研究を共に行ってきましたが、優秀な卒業生の検査技師さんが多くいると感心した次第です。これも保健学科での学生への教育活動が充実しているためだと思っていました。やはり学生教育は大事だと感じた次第です。縁があり保健学科にお世話になってからは学生教育、研究の充実性を一番に考えこの

3年間打ち込んできました。微力ながら2020年度臨床検査技師国家試験合格率100%を達成することができたのもこれまでの保健学科での充実した教育プログラムのおかげであると感謝しております。私どもは先輩方が培って、続けてきた保健学科の教育、研究をさらに充実したものにしていく責務があると思っています。次の30周年に向け、さらに発展していく九州大学医学部保健学科を3学科で構築していきたいと思っています。そのためには諸先輩方、保健学科卒業生、関係各位のご協力、現教員の熱意があつてのものだと思います。今後も保健学科のご支援、ご協力を賜りたいと思っております。

最後に同じキャンパス内から保健学科の成長を眺めながら益々保健学科が発展していくことを祈念してお祝いの言葉にさせていただきます。また、現職員として諸先輩方、卒業生のこれまでの熱意に対してお礼の言葉にさせていただきます。今後も保健学科の発展をお約束いたします。

## 20周年を迎えて

前九州大学大学院医学研究院保健学部門検査技術科学分野 分野長、教授  
**水野 晋一**



医学部保健学科は、2002年に九州大学医療技術短期大学部が改組されて設立され、このたび20周年を迎えることとなりました。2007年、2008年には大学院として修士課程、博士課程が開設され、現在は学部学生の所属する医学部保健学科、大学院学生が所属する大学院医学研究系学府保健学専攻、教員が所属する大学院医学研究院保健学部門よりなる大学院大学となっています。私は2018年4月に検査技術科学専攻の教授として着任しましたが、これまでの保健学科の設立そして発展に多大なご尽力をされた多くの方々にご場をお借りして感謝申し上げたいと思います。

検査技術科学分野では、学部の4年間で臨床検査技師としての基礎を教えることが求められています。学部1年生は伊都キャンパスでの基幹教育を受け、4年生は臨地実習と卒業研究を行うカリキュラムとなっており、医療・医学の講義実習を受ける期間は主に2年生と3年生との2年間となり、学生にとってもハードなスケジュールとなっています。教育カリキュラムの臨地実習では、九大病院検査部の先生方に3ヶ月におよぶ病院実習をご指導いただいておりますが、学生がはじめて臨床を経験し職責に自覚を持つようになる大切な実習となっており、保健学部門の教育へのご理解とご協力に感謝しております。また、学生の研究に対する意識も年々

高まっており、4年生の卒業研究への取り組みは教員の個別指導により熱心に行われ、より深い専門的知識の修得がなされています。さらに大学院として修士課程への進学も充実してきています。一方、研究者の育成という観点からは博士課程での研究活動が期待されますが、未だ進学者が少ないことが課題となっており、生命科学と臨床検査の将来を担う研究者を育ててゆくための教員の一層の努力が必要であることを強く感じています。

新型コロナウイルスの先行きは未だ見とおすことができませんが、現在では臨床検査技師は“鼻腔拭い液・鼻腔吸引液・咽頭拭い液”の検体採取も業務として実施可能となっています。検査分野の同門会である青桐会からは実習用の鼻腔検査ファントムの寄付など多くの援助を受けており、現場での力になれる有為な臨床検査技師が育っていくよう講義や実習を進めています。がんゲノム医療をはじめとして医学・医療の進歩はめざましく、人工知能（AI）など新しい技術が様々な分野に導入されていることを踏まえて、本学の卒業生が先端医療にも十分な知識と理解を有するよう教育に取り組んでいます。臨床そして研究と幅広く社会で活躍できる人材を育成すべく努めたいと考えており、これからもご協力ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

## 保健学科設置20周年を祝って

元九州大学大学院医学研究院保健学部門 部門長  
元九州大学医療技術短期大学 部長  
国際医療福祉大学大学院 教授、高邦会高木病院 臨床検査部長  
**梅村 創**



ますます発展を続けられる保健学科の設置20周年に寄せてお祝いのご挨拶を申し上げます。

看護師、診療放射線技師、臨床検査技師などの専門医療職人を四年課程教育で育成する必要性は時代の中で求められてきたもので、四年制化は九州大学医療技術短期大学の先生方の悲願でもありました。九州大学医学部保健学科は平成14年に設置された基幹国立大学の保健学科であり、専門的実践能力を備えた医療職や研究者に発展できる人材の育成、大学院教育の展開などの使命を背負ってのスタートでした。設置の苦労も、今では楽しくまた誇りをもって振り返ることができます。九州大学の杉岡洋一元総長、梶山千里元総長、九州大学医学研究院をはじめ多くの研究院の先生方、ご指導いただいた文部科学省高等教育課、医療技術短期大学の教員・事務部をはじめ設置に際しご尽力された全ての皆様に感謝申し上げ、20周年を慶び、お祝いを申し上げます。

設置後は順調に大学院博士課程まで設置を成し遂げられ、学部・大学院の卒業生諸君は、保健医療福祉分野での中核的人材となりつつあります。私はまだアカデミーと臨床に属する身ですが、卒業生に接すると素晴らしい若者たちであることを実感でき、20年間の歴史と実績を築かれそのような人材を育成された教員の皆様の

ご努力に心より敬意を表します。

超高齢化、少子化、国際化のなかで活躍する人材育成を目指してスタートした保健学科は、予期していなかったパンデミックに遭遇しています。遡れば保健学科の前身は看護学教育として1895年に創設されており、2度目のパンデミックということになります。2019年に発生した新型コロナウイルス感染症パンデミックは保健学科の全ての活動に深い影響を及ぼし、多くのご苦労があったものと察します。このパンデミックを克服するには、一丸となった多職種連携・研究と臨床の連携を実践することが必要な時期と感じます。活躍する卒業生の皆さんにも引き続きご支援・ご指導をいただきたいと願います。

九州大学医学部保健学科が発展を続けられ、ますます多くの人々の健康維持・促進、病気の早期発見・治療に貢献されると確信しています。将来に亘り、国内のみならずアジアや世界のなかで輝く教育・研究の拠点であり続けられることを祈念し、20周年のお祝いの言葉とさせていただきます。

## 20周年を迎えて

元九州大学大学院医学研究院保健学部門 部門長  
国際医療福祉大学 教授、福岡山王病院予防医学センター  
九州大学 名誉教授  
**加來 恒壽**



保健学科20周年を迎えましたこと心よりお慶び申し上げます。平成11年から産婦人科から着任し、母性看護学、助産学などの領域の講義をしておりました。着任当時は組織も小さく皆さんと一緒に過ごしておりましたが、学部、大学院の設置と共に日々忙しくなってきました。

平成20年から4年間、部門長を務めさせていただきました。博士課程設置の準備を始め学内そして東京での文部科学省との粘り強い折衝を経て、平成21年4月から九州大学大学院医学系学府保健学専攻博士後期課程（以下博士課程）が設置されて、念願であった学部・修士課程そして博士課程の一貫した教育・研究の体制が整いました。また平成20年度から文部科学省の質の高い大学教育推進事業で「医療現場との双方向性を持った保健学教育」が採択され、大喜雅文教授を中心とした若葉会・投光会・青桐会・みのり会・健桜会などの同窓会の御協力と共に連携してITを活用した事業を推進しました。更にアジアの保健学研究者および指導者の育成を目標とした国際的な保健学教育に関する研究プロジェクトも着々と進めました。マヒドン大学、香港大学などの海外から大学院生、研究生も増えています。

平成22年に国際大学・九州大学・国連大学協力会共催シンポジウムが「グローバル化した保

健と医療」のテーマで国内外の研究者の熱い討論がなされました。

平成30年3月に九州大学大学院医学研究院保健学部門教授を定年退職し、九州大学名誉教授を授与されました。

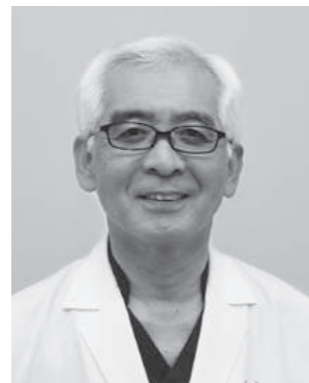
平成30年4月より国際医療福祉大学教授として母性看護学、助産学の教鞭をとり、福岡山王病院予防医学センターで子宮頸癌の検診を行っています。

## Beyond 20th Anniversary

“ローテク・アナログ・ファジー爺のアナクロ発言”

元九州大学大学院医学研究院保健学部門 部門長  
聖マリア病院 先進メディカルセンター長

平田 秀紀



平成19年に一般病院勤務からいきなり大学教員となり当初そのギャップに苦勞したが、定年後大学から現場へ戻り7年、教育職の経験が生かされていると思う。在任中は平成21年の皆既日食や東日本大震災など宇宙地球規模の天変地異に遭遇し、学生たちと森羅万象を共有した。また国際活動も韓国や台湾をはじめアジアの国々の大学とも相互訪問して直接交流も多く、研究室の学生を現地へ派遣し交歓したのも懐かしい。今回の20周年とは在籍した10周年からもう10年経ったことになる。この間社会も個人的にも激変した。

在職中の8年間は学生指導はもとより大学人としての分野の運営や、部門長を拝命した2年間は耐震化工事に伴う本館の改修、部門内予算執行を工夫してのCTの導入、助産学の大学院化と看護学科の講座再編成など時代の流れの中で部門内再編成の変革期でもあった。何度も話し合いを重ね本部への提出書類の完成度を高め、箱崎にあった大学本部との間を幾度となく自転車で往復したのを覚えている。関係各位の尽力に感謝している。

大学の伊都キャンパスへの移転も始まり、1年時のリベラルアート教育の中で専門教育のあり方や専門職という国家資格とそれに伴う責務を入学したての学生へどのように伝えるかなど

キャンパス移転と大学改革に伴う現場での課題も浮き彫りになり始めていた。それにしても10周年の頃は今思うとコロナ感染のパンデミックもなく記念誌も作り祝賀会もできた実に恵まれた時代であった。

近年日本の研究力・学術力が論文数では低下傾向にあるという。技術大国日本といわれていたが、昭和の右肩上がりの時代は終わり平成を経て令和の御代に入っている。急速な少子高齢化や地方過疎化、新興感染症や異常気象による大規模災害など疾病構造の変化、そしてゲノム医療や精密医療など保健医療福祉の世界でも明らかにパラダイム転換が起きている。

臨床に裏打ちされた実学を旨とする保健学の近未来像は、良質で最適な医療の効率的安定供給にある。電子カルテを用いたデータサイエンスによるEBMが蓄積され、他方TRによるブレイクスルーも生み出す機運はある。然しながら“専門職としての優しさとは、患者に寄り添うとは”やはり「病む人の気持ちを」が原点である。“卓越した技術がなければプロではない。しかし技術のみでは暴走する”。煩わしい学内政治に巻き込まれる事もなく、社会の片隅で実地診療の日常に埋没する爺の戯言である。

## 保健学科20周年を祝して

元九州大学大学院医学研究院保健学部門 部門長  
九州大学 名誉教授

大喜 雅文



保健学科設置20周年を迎えましたこと心よりお慶び申し上げます。私は1996年に前身の医療技術短期大学部に赴任した後、医学部保健学科、大学院医学研究院保健学部門へと歩みを共にし、2019年に退職するまで23年間九州大学に勤めさせていただきました。2002年の保健学科設置には短期大学部の教職員が一丸となって協力し、皆で設置を祝ったことが懐かしく思い出されます。この変革の時期に九大で過ごせたことを大変幸せに思っています。

保健学科への改組の第一の目的は、保健学領域での国際的リーダーとなれる医療従事者、教育者、研究者などの人材育成でした。20年を経て多くの卒業生が様々な領域で責任ある立場で活躍しているのを知ることがあります。そのたびに当初の目的が着実に達成されているようで嬉しく思っています。学生だけでなく保健学科全体の国際化も推進するために、毎年保健学国際フォーラムを開催してきました。保健学関連のゲストによる英語での講演や海外の大学との学生間交流などを企画し、これによりアジアを中心とした海外の大学との国際交流も促進されました。私が保健学科長をしていた2015年の第10回保健学国際フォーラムでは“My message to all of you interested in global health”の題で尾身茂先生にご講演いただきました。先生は

WHO在任中に西太平洋地域でポリオ根絶を達成したご功績で有名でした。しかしながら、その後COVID-19のパンデミックが起こり、日本での責任者として対応に当たられるようになるとは思いませんでした。

三年間にも及ぶパンデミックは学生にとっても大変な経験であったろうと察します。大学時代は勉強だけでなく、広い分野の多くの人と出会って社会性を育む時期であるにもかかわらず、人との接触が制限されては楽しい大学生活とは言えなかったでしょう。保健学科の学生諸君には、この全人類に課せられた試練を乗り越えて、自分の為すべきことをあらためて認識し、理想に向かって邁進して欲しいと願っています。

保健学部門の皆様には、これからも未来を担う優秀な人材の育成を期待しています。保健学部門の益々のご清栄とご発展をお祈り申し上げます。

## 保健学科で導かれた教育・研究と運営に感謝あるのみ

元九州大学大学院医学研究院保健学部門 部門長  
福岡看護大学 副学長、研究科長、福岡歯科大学医科歯科総合病院健診センター

樗木 晶子



保健学科の設置20周年に、心よりお慶び申し上げます。

1996年4月、一介の循環器内科医が前任の安部良治先生のあとを継いで医療技術短期大学部で生理学と臨床生理学を教えることになりました。教育の何たるかもわからないまま非常に教育に熱心であられた安部先生の講義ノートを頼りに小島夫美子先生の強力なご支援を得て教育の醍醐味を教えてくださいました。当時在職されていた個性豊かな強者の先生がたと生徒との垣根の低さもあり、教育の面白さに洗脳されました。上田一雄先生や梅村創先生が中心となって医療短大の4年制化に向け3つの学科と助産学専攻が一丸となって取り組み始めた古き良き時代のなごりを経験できたことは、保健学科となった後の教育を進めてゆく上での大きな財産となりました。

念願かなって2002年に4年制となり、2007年には修士過程、2009年には博士課程の設置へと発展していった全ての過程に参画できたことも私にとって貴重な経験でした。その後、本館の改修も行われ、基礎B棟や総合研究棟に教員が分散しました。博士課程が軌道にのり大学院生と共に研究できる体制も整い、国際化を推進する九州大学のスーパーグローバル創成支援も受けて海外交流や共同研究なども活発になってきました。台湾の高雄医科大学や香港大学、タイのマヒドン大学なども双方向の交流が定着し、アジアの国々の教育研究が我々より遙かに国際

化されていることに学生や教員が大きな刺激を受けたと思います。

2018年より定年の2020年3月まで保健学科長を拝命しましたので、定員削減でギリギリのマンパワーで運営されている保健学科の教育や研究の現状を打開できないか、予算獲得にチャレンジしました。2019年に看護が中心となって申請した教育の質向上支援プログラム（NEEP）が採択されたことは国際交流事業の追い風となりました。また、大学改革活性化制度にも応募し、「アジア地域における周産期保健医療開発及びグローバル人材育成」というテーマで採択され任期付ではありますが、新たな人材確保にもつながりました。

2019年には医学科と交渉し、本館と基礎B棟に保健学科の研究室や講義室を集約しコンパクトな体制となって今日に至っています。振り返ると山あり谷ありの保健学科の「うねり」を私の人生の一部として過ごさせていただきました。

2019年12月末、武漢から発生したコロナ感染症パンデミックのために年度末の行事は全て中止され、かろうじて2020年1月に最終講義を開催させていただき、密やかに幕を引くことができました。

2022年秋、やっとコロナ禍も収まりつつあります。長かった耐乏生活に幕を閉じ20周年を皆様と祝うことができることを感謝とともに嬉しく思います。

## 20周年を迎えて

独立行政法人国立病院機構九州医療センター放射線部 診療放射線技師長

大浦 弘樹



この度は、九州大学医学部保健学科が20周年を迎えられ、心よりお祝い申し上げます。おめでとうございます。九州大学医療技術短期大学部診療放射線技術学科19期生として医系地区で過ごしてから30年余りになります。九州大学医学部附属診療エクス線学校、九州大学医学部附属診療放射線技師学校、九州大学医療技術短期大学部診療放射線技術学科、九州大学医学部保健学科と名を変え、診療放射線技師養成60年以上の歴史の1/3が保健学科の歴史となりました。診療放射線技術学科も医用量子線科学分野となり、診療放射線技師教育が大きく変わった契機のように思います。私が過ごした学び舎は、今も健在ではありますが、外装、内装も変わっています。時代に合わせて変化することとあり続けることを教えてくれているようにも思います。

医療短大から4年制が設置される時、配置換えにより九州がんセンターでの勤務していました。診療放射線技術学科同窓会透光会のお手伝いもその頃はから始まりました。卒業してから医療短大に通うことは滅多にありませんでしたが、この4年制への移行、4年制の入学、医療短大の閉校の時期は部外者ではありましたが、近くで見ることができました。時々、校舎内で先生方にお会いしてお話をお伺いすることがあ

りましたが、携わっていた方々の熱意には恐ろしさを感じておりました。それから20年。もうそんなに経ったかと思うと早いと感じます。私もその後、同窓会から離れましたが、保健学科とは、ここ数年、コロナ禍で十分ではありませんが、実習の受け入れなどほど良い関係を続けられているように思います。

一生学び続けることを要求される業界です。新しい技術や進歩した装置を十分に活用しなければなりません。時代に合わせて進歩していくことは、生命を委ねられる職種の使命と考えます。保健学科卒業生が診療放射線技術を支える原動力になり、指導する立場になってきています。卒業生の自負が、これからの輝ける医学部保健学科の未来を導いてくれることを祈念いたします。

## 医学部保健学科20周年をお祝いして

公益財団法人福岡労働衛生研究所診療技術部診療放射線科  
大石 哲也



医学部保健学科創立20周年を迎えられ心よりお祝い申し上げます。

私は前身であります医療技術短期大学の23期生として平成8年に卒業後、現在まで診療放射線技師として検診業務に従事しています。

保健学科へ訪問時、玄関先の桜の木を拝見するたびに学生当時、放射線写真学の実習において、その桜の木の下でアナログカメラ撮影を行い、実習棟の暗室でフィルムを現像したことを懐かしく思い出します。

医療技術短期大学部より医学部保健学科の4年制への改組について働きかけていることを在学時より先生から、お話を伺っていましたので、平成14年の創立までには多くの先輩方のご尽力、ご苦勞があったことと思います。

当研究所は平成20年度より臨地実習の検診部門として保健学科に関わらせて頂いております。検診領域のなかでも胃X線検査に特化して実習をさせて頂いており、1グループ3日間の実習期間で行っています。学生には午前中は施設検診、または検診車での見学を頂いておまして、特に検診車の見学においては、検診先への朝早い出発時間でも同行頂いておりますので、通学にご苦勞頂くことが多々ございます。午後からは講義として、胃X線検査の基礎事項、撮影手順や読影手順、検査時のリスク、被ばく管理に

ついて行い、受診者側として撮影台上での模擬体験も行って頂いております。

また、平成26年度から保健学科の5ヶ年プロジェクトでありました「実践能力強化型チーム医療加速プログラム」へ臨地実習施設として参加させて頂き、多くのことを学ばせて頂きました。

コロナ禍により令和2年度から臨地実習の受け入れの中断をさせて頂いておりますが、近い将来再開をして、みなさんと楽しく学べることを心待ちにしています。

最後になりましたが、保健学科の今後ますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。

## 保健学科20周年に寄せて

元九州大学大学院医学研究院保健学部門看護学分野 教授  
九州大学看護師同窓会若葉会 会長  
第一薬科大学看護学部看護学科 学科長

平田 伸子



九州大学医学部保健学科20周年の節目を迎えられ、誠におめでとうございます。

九州大学看護師同窓会若葉会（以下、若葉会）を代表しお祝いの詞を申し上げます。

九州大学における看護教育は、1895（明治28）年に福岡県立病院に看護婦養成所併設に遡ります。明治36年京都帝国大学福岡医科大学附属病院看護婦養成所を継承。1911（明治44）年九州帝国大学医科大学附属病院看護員養成科と改称。1919（大正8）年九州大学医学部附属病院看護員養成科、1945（昭和20）年看護員養成科を厚生女学部と改称。翌年の看護制度改革に伴い、看護教育は高校卒業後の3年課程となり校名が九州大学看護学校となりましたが、1961（昭和36）年九州大学医学部附属看護学校と改称。1971（昭和46）年医療技術短期大学部看護科（'76年看護学科）に昇格。校名を改称しつつも九州大学における約130年に及ぶ看護教育の歴史には、残された記録から、ここで学んだことに誰もが誇りをもって巣立ち看護界のリーダーとして羽ばたいていったことが窺えます。九州大学医療技術短期大学部開設から長い時間を経ての保健学科への昇格でしたが、待ち望み続けてきた若葉会には大きな喜びでありました。これまで若葉会は母校の発展を願いつつ、看護学生へも奨学金貸与や国際交流支援金をはじめ

ろいろな形で支援をし続けてきています。これからも継続して支援したいと考えています。

私は短期大学部から保健学科への移行期そしてその後もしばらく教員として籍を置き、錚々たる先生方とともに仕事をし、貴重な経験を積むことができました。初代保健学科長を務められた東田善治先生や松岡緑教授から、「保健学科はまもなく大学院化に向けた準備が始まるので、教員は早く博士の学位取得ならびに論文業績を積むように」とたびたび指導を受けたものです。文部科学省における学部新設の教員審査は厳しいと緊張感をもって聞かされました。時間貧乏ながらも多くのことに挑戦し、快い緊張感を伴い精いっぱい頑張り続けた教員生活だったと今振り返ると、心は青年期でした。

この20年間、看護を取り巻く状況は大きく変化し、看護系大学が増えました。近隣の看護系大学や保健医療機関における多くの要職を九州大学で看護を学んだ卒業生が務めています。看護界のリーダー育成への熱意と努力はこれからも変わらず引き継がれていくことと思います。

保健学科創設20周年を一つの節目として、これまでの先達の御功績を踏まえ、今後更なる飛躍を遂げられますよう祈念しまして祝辞といたします。そして、ご関係の皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

## 保健学科創立20周年に寄せて

九州大学助産師同窓会みのり会 会長  
佐賀大学 名誉教授  
齊藤 ひさ子



九州大学医学部保健学科創立20周年を心よりお喜び申し上げます。

多くの人々の長年の願いと夢や期待を託されて保健学科が発足してから、既に20年の歳月が流れたことに感慨深さを覚えます。

激しく変動する社会の中で、看護学教育にはますます高い水準が要請されています。今日、九州大学医学部保健学科は独創的な学部教育に加え、修士課程・博士課程をもつ高度な看護学の教育・研究拠点として、地域および国際社会の高い評価を得ていることは周知のことです。輝かしい発展を遂げられた保健学科20年の越し方に深い敬意を表します。

看護学教育と同様に助産学教育においても、高度な専門性と高い実践能力を有する人材育成が求められ、全国の国立大学においても独自性を確保しつつ様々な試行錯誤が行われています。

10周年記念誌の寄稿では、「助産学教育課程をどのように創造していかれるのか、同窓会としても関心の高い課題です。」と記しました。

平成27年4月大学院医学系学府保健学専攻修士課程助産学コースが開始となり、助産学教育が大学院に移行しました。保健学科看護学専攻助産師コースは平成30年3月に在学生の卒業をもって廃止となりました。この3年間、2コースの教育が併行して実施されました。この期間、

加来恒壽前教授、谷口初美前教授をはじめ多く教員の方々が2つの助産師教育に熱心にご尽力下さいました。言葉では語られないほどの大変なご苦勞がしのばれます。心より感謝申し上げます。また、学生たちは切磋琢磨しながら相互に学びあい助産師スピリットを高めてあつていと伺い、頼もしさと情熱のゆるぎなさに感動しました。

みのり会は、助産学教育を受けた卒業生の同窓会です。今年で110周年を迎えました。現在、大学院医学系学府保健学専攻修士課程助産学コースで学ばれた5回生までの修了生を迎え1470名の会員で構成されています。

令和2年以降はコロナ禍の影響が深刻な課題となり、非日常的な体験と多様な対処が続けられています。変化し続け予測が困難な社会にあつては、「学びのデザイン」が重要で、知的好奇心を原動力に、論理的思考を鍛え、勇気をもって行動できる力の涵養が必修であると指摘されています。未来に向けて成長し続ける21世紀の医療人育成に期待しています。

みのり会は、これまで育んできた独自の文化や伝統とのつながりを大切に、保健学科の将来を見守り、応援していきたいと思えます。

未来への更なる飛躍を祈念し九州大学医学部保健学科の益々のご発展をお祈りいたします。

## 創立20周年に寄せて

九州大学放射線技術科学専攻同窓会透光会 会長  
阿部 一之



九州大学医学部保健学科（放射線技術科学専攻）創立20周年を迎えられ、心よりお祝い申し上げます。

我が同窓会「透光会」の歴史を紐解くと、1954年（昭和29年）4月に九州大学医学部附属診療エックス線技師学校が設置されてから、1965年（昭和40年）に専攻科設置、1969年（昭和44年）に九州大学医学部診療放射線技師学校に改組、1971年（昭和46年）4月に九州大学医療技術短期大学部（診療放射線技術科）設置、2002年（平成14年）10月に九州大学医学部保健学科（放射線技術科学専攻）が発足、2007年（平成19年）4月に大学院医学系学府保健学専攻修士課程が設置されました。さらに、2009年（平成21年）4月に大学院医学系学府保健学専攻博士課程が設置されてから現在までの学部卒業生は476名を数えるに至り、今春には16期生が社会に羽ばたきました。

母校は国内外でもトップクラスの診療放射線技師養成の大学になり、深い洞察力と高度な専門性を備え、幅広い知識と応用力・開発力を持ち、豊かな人間性を備えた資質の高い医療人として教育理念に合致した高い評価を受けています。1期生から振り返りますと、医療分野、教育分野、行政分野、企業など多岐にわたり数多くの優秀かつ将来が囑望される人財を輩出して

おり頼もしい限りです。

折しも同窓会「透光会」は創立60周年を迎え、記念講演会、記念式典、祝賀会・新入会員歓迎会を2019年2月23日、九大医系キャンパス同窓会館で開催しました。

先輩諸氏にご指導を受け、批評されたりしたのが次のステップに繋がり、伝統ある同窓生としての誇りでもあります。今後も保健医療の分野だけでなく、様々な分野で活躍していただきたいと願っています。

九州大学校友会ウェブサイト「透光会ホームページ」を開設して、在校生との意見交換会を一度開催してきました。先輩が築き上げたすばらしい伝統を引き継ぎながら新たな気持ちで同窓会に積極的に取り組んでいく所存です。本同窓会の益々の発展のため、同窓会へご支援・ご協力いただきますようお願い申し上げます。

九州大学医学部保健学科（放射線技術科学専攻）の一層のご発展とご活躍を祈念致しまして、お祝いの挨拶とさせていただきます。

（九州大学校友会「透光会」ホームページ 2022年10月記）

<https://koyukai.kyushu-u.ac.jp/alumni/232/associations/detail>

## 根 養えば 樹 おのずと 育つ

九州大学医学部保健学科検査技術科学同窓会青桐会 会長  
元CRC特別指導教官  
木村 潤一郎



九州大学医学部保健学科創設20周年おめでとうございます。検査技術科学の母体である九州大学医学部附属衛生検査技師学校は1960年に設置され、1971年には九州大学医療技術短期大学部創設。ここまでは速かったのですが、保健学科創設までは諸事情があり手間取りました。しかし、2003年医学部保健学科として後輩を迎える事が出来ました。教官、事務官の方々の並々ならぬお力の賜物です。青桐会として、4年制卒業会員を迎える事は悲願でした。そして、20年間はあっという間に過ぎ、もう20年なのかという思いです。さて、冒頭に記した「根 養えば 樹 おのずと 育つ」の文字は、母校の基本方針であると思っています。「国試の対策は自分達でやりなさい。講義が解っていれば、必ず合格します。」と。私は講義が理解出来ていなかったで、その言葉を信じずに、どうにか国試を乗り切りました（教えに背いていました）。私が就職後実習に来た後輩から、よく相談も受けました。最も多かったのが「夏休みに、他校の学生と一緒に働いて、他校の学生はどの検査には何をどう用いるのか、良く知っているのに驚きました。私たちはこのままでいいのでしょうか？」と不安そうでした。その度に「君たちにはしっかりとした基礎がある！！、就職後2年くらいは実戦、実務で後れを取るかもしれな

いが基礎が出来ていけば徐々に技術、特に学術面では引けを取らないようになる」とアドバイスをしていました。

在校生、卒業生の皆様、何事においても、寒い時期はあります。そのような時こそ、根っこを下へ下へ、横へ横へ伸ばす時期です。根っこがしっかりしていれば、樹は枝葉を広げ、蕾を膨らませてくれます。

知識は、今日、明日役立つものも大事かもしれませんが、しかし私は、5年後、10年後に役に立つ知識、ひょっとすると一生役に立たないような知識が大好きです。

皆さん、役に立たない心豊かになる勉強をしましょう。

追伸。

先日、コロナ6波と7波の間隙を縫って本学名誉教授であり恩師でもある穴井元昭先生（90歳）と、技師学校1期生でありCRC相談役の江川洋先輩（82歳）と中州で会食、カラオケに数回行きました。

-----お元気です。ひたすら元気です。

## 20周年を迎えて

1期卒業生  
保健学科同窓会健桜会 会長  
IQVIA ジャパン(株)  
井上 誠也



九州大学医学部保健学科創立20周年、誠にありがとうございます。第一期卒業生として、また同窓会を代表しまして心よりお祝い申し上げます。

10周年記念誌が発刊される2013年にも寄稿のお声かけをいただき、それから早10年が経ちました。目まぐるしく変化する世の中においても、本学科が発展を続けられ、また多くの卒業生が各方面で活躍されていること大変嬉しく思います。

私は卒業してからすぐに医療系のメーカー企業に就職し15年ほどが過ぎました。企業・メーカーの立場から医療を下支えする気持ちと責任を忘れないことをこころがけてきました。企業はともすれば営利目的を重視する場面が少なからずありますが、この九大保健学科で学んだからこそ、自分たちが販売する製品やサービスが医療においても役立っていることを想像することができ、それが何よりもの意義と感しながら業務をこなす日々です。

さて、看護、放射、検査の3専攻合同の同窓会「健桜会」の設立当時を振り返ると、私が卒業する年度の冬にその話がでてきました。国家試験や卒業研究発表の準備の落ち着かない時期に、事務方や各先生方のご協力を得て、会則や役員を短期間で決めた記憶が残っています。

現在、同窓会の活動としては年1回理事会を開催し、学科や在学生へ支援の討議、卒業生に送る記念碑贈呈など行っています。これまでに保健学科棟の中庭にあるベンチ贈呈、10周年記念誌や本20周年記念誌の作成においても作成寄付を心ばかりさせていただきました。今後はさらに、在学生や卒業生の交流を深められる機会について検討したく考えています。

末筆にはなりますが、保健学科が次の10年そしてさらにその先においても、益々発展していくことを祈念いたしております。

## 九州大学医学部保健学科 20周年を祝して

2期卒業生  
保健学科同窓会健桜会 副会長  
九州大学病院看護部

宗岡 貴一



九州大学医学部保健学科が創立され本年で20周年にあたりまして心よりお慶び申し上げます。私は看護学専攻2期生として平成16年に九州大学医学部保健学科に入学致しました。大学の4年間の思い出は、4年生の時の実習がきつかったなど、そればかり思い出します。男子学生は6人いたのですが、皆個性豊かな連中ばかりで、現在も私を含め3人が看護師として従事しています。そんな中でも気の合う仲間と飲みに行ったり旅行に行ったりと楽しい思い出もたくさんできました。

私は九州大学病院に入職後、手術部で5年、救命ICUで7年、現在は南8階の外科病棟に異動し3年目になります。幸い希望に沿ったキャリア形成ができていて、急性期看護領域はほとんど経験できました。今後は精神科や内科系の慢性期看護も経験できればいいと考えています。

また、同級生のキャリアアップも目覚ましく、職場において中堅からベテランと呼ばれる立場へ変化している者も多くいます。その中には副師長などの管理職として従事する者や、専門看護師や認定看護師などエキスパートナースとして従事する者もいます。学生時代に実習で見た副師長や認定看護師として自分たちの同級生が働いていることを考えると、20周年という時間の経過を感じると共に同級生として誇らしく思

います。また家庭を持ち、子育てに奮闘しながらも看護師として働いている者もいて、それぞれ40歳を目前に大活躍中です。

私も現在3人の子供を抱える父親となりました。仕事以外の日は子供の習い事の送迎や家事、育児であつという間に1日が終わります。学生の時は全く想像していなかった日々です。この寄稿を書くことで久しぶりに回想していますが、なんだかんだ言っても学生の時は自由で楽しかったなとつくづく実感しています。また、自分が親になる事で、両親の苦勞も身をもって感じる事ができて、親って大変だな、すごいなと再認識できました。

現在も保健学科の学生が実習に来たり、また新人として入職してきたりと、後輩と関わる機会も増えてきました。みな優秀できらりと光る物を持った者ばかりです。これもひとえに保健学科で教鞭をとられている先生方のご尽力、また、学生の頑張りがあってこそだと思います。保健学科の卒業生として本当に頼もしく、うれしく思います。

最後に、九州大学医学部保健学科の今後益々の発展を切に祈念申し上げ、お祝いの言葉と致します。

## 保健学科設立20周年に寄せて

7期卒業生  
保健学科同窓会健桜会 理事  
福岡工業大学情報工学部

松延 佑将



九州大学医学部保健学科の設立20周年を迎えられたこと、心よりお祝い申し上げます。

私が入学したのは2009年、伊都キャンパスに全学教育が移転した初年度でした。とても大きく綺麗なキャンパスで、初めて伊都キャンパスに立った日はワクワクと胸を躍らせたことを今も覚えています。当時、保健学科だけが2年前期から馬出で週5日専攻科目を受けなければならず、1年次に教養科目の単位をすべて取らなければ留年になる進級制度がありました。そのような中で私は第二外国語で選択したドイツ語の講義で単位取得率の低いと評判の先生のクラスに振り分けられてしまいました。たまたま同じクラスになった友人と伊都キャンパスの遠さやドイツ語の難しさ、保健学科だけに課された厳しい進級条件に文句を言いながら図書館で勉強したことが今ではとても良い思い出になっています。先日、病院キャンパスに伺った際、図書館が改修工事を経てリニューアルオープンすることを知り、ここで夜遅くまで友人とテスト勉強したことを思い出すとともに、文句を言いながらも頑張ったあの自習室も変わってしまったのだろうか感慨深い気持ちになりました。

私は学部4年、修士2年、博士3年と9年間大学に通っており、保健学科が設立してから20年のうち半分近く在籍していました。これだけ長い

とたくさん思い出がありますが、特に大学院時代に様々な国で学会発表や大学間交流をさせて頂いたことは私の宝になっています。そこで必死に英語を勉強したことが今の私の糧となり、また大学間交流で知り合った他国の学生とはいまだにSNSでの交流があります。このような貴重な経験を積めたのも、保健学科や先生方のサポートがあったからこそ深く感謝しております。長い間大変お世話になった恩をお返しすべく、私は保健学科同窓会「健桜会」の理事として卒業生・在校生・未来の後輩が繋がってゆけるよう活動に取り組んでおります。今後も一層活動してまいりますのでよろしくお願い申し上げます。

最後となりますが、保健学科のさらなるご発展と卒業生、在校生の皆様のご活躍を心から祈念しております。



## 九大で学んだ9年間を振り返って

博士課程卒業生  
量子科学技術研究開発機構  
赤松 剛



九州大学医学部保健学科設立20周年、おめでとうございます。私は2007年の学部入学から2016年の大学院博士課程修了まで、九大に9年間在籍しました。現在(2022年10月)は千葉市にある(国研)量子科学技術研究開発機構に研究員として勤務しています。次世代核医学イメージング装置の研究開発が主な業務です。研究グループの同僚は工学・理学・情報学・医学の博士号を持つ研究者ばかりで、保健学博士は私1人ですが、診療放射線技師としての知識と経験が研究開発に役立っています。

振り返ると、九大での9年間は私にとって大きな決断の連続でした。診療放射線技師になろうと決めて九大保健学科に入学した長崎市出身の私は、学部卒業後は地元に戻るつもりでした。考えが変わったのは、学部4年の時です。佐々木雅之先生のご指導のもと卒業研究に取り組んだ私は、やればやるほど新しい発見がある“研究”に、大きな魅力を感じました。私はとても幸運だったため、佐々木先生という素晴らしいメンターに恵まれ、最初に取り組んだ研究をスムーズに論文発表できました。こういった成功体験をきっかけに修士課程へと進み、地元こだわらず視野をもっと広げたいと考えようになりました。

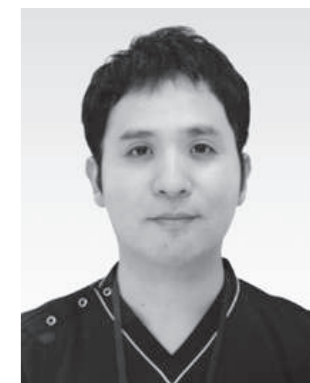
修士課程で充実した日々を過ごしながら、博

士課程への進学は迷いました。同期の多くが医療機関で働き出していることもあり、早く働きたいという気持ちを強くもっていました。そこで、佐々木先生の勧めもあり、“医療機関への就職と博士課程への進学”を両立させることを選択しました。前述のとおり私は幸運であったため、神戸市にある、臨床研究を重要視した医療機関にタイミング良く就職することができました。診療放射線技師として働きながら博士課程に在籍した3年間は非常に充実しており、当時の選択は間違いなく正解だったと思います。将来の選択肢や自分の視野が大きく広がるため、博士課程への進学を少しでも考えている方には、迷いなく進学をお勧めします。

九大保健学科が輩出してきた卒業生・学位修了生は様々な分野で活躍しており、同門生として頼もしいです。保健学を牽引する高等教育機関として、九州大学医学部保健学科の益々の発展を心より祈念しております。20周年、おめでとうございます。

## 保健学科設立20周年に寄せて

博士課程卒業生  
浜の町病院臨床検査部  
西村 和徳



この度は保健学科設立20周年おめでとうございます。たくさんの卒業生が様々な分野で活躍していることを大変嬉しく思います。

私は2005年に3期生として保健学科に入学しました。1年次は朝から六本松キャンパスで教養科目の授業を受け、午後は病院地区で仲間や先輩方と楽しくサークル活動に励みました。地下鉄やバイクでキャンパス間を移動していた頃を懐かしく思います。現在、六本松キャンパスは再開発の拠点となり、跡地には福岡市科学館が建設されました。学生街だった六本松地区は古き良き面影を残しつつも活気あるお洒落な街になりました。

2年次からは馬出キャンパスで専門科目を学びました。臨床経験豊富な先生方の授業は興味深く、とても勉強になりました。休み時間には仲間や先生方とテニスをしたり保健学科棟の前でお花見をしたりと、思い返すと周囲の方々に恵まれた充実した学生時代でした。当時、細胞形態を指導されていた杉島先生とご縁があり、病理細胞学研究室に所属しました。研究室での先生方と学生の距離感が大好きでした。

浜の町病院に就職後、社会人学生として本学科の博士課程に進学しました。仕事をしながら臨床研究や分子生物学的研究を行うことはとてもプレッシャーがありましたが、先生方や先輩

方、家族の協力もあり無事に修了することができました。保健学科設立20周年のうち10年間で大学で過ごしたことになると思いますが、保健学科はどの年代も居心地よく感じました。現在、私は血液検査室で認定血液検査技師、細胞検査士として白血病に関する検査に携わっています。学生時代が長かった分、今後は臨床診療に貢献できるよう努力したいです。

大学院を修了して社会人として勤務する検査技師は今後どんどん増えていくと思います。私の同級生も病院や企業に勤務したり教員として学生を指導したりと、各分野の第一線で活躍しています。何らかの課題を見つけてその課題を解決できる力は分野を問わず新たな道筋を示してくれるものと思います。在校生や社会人の中に大学院へ進学を迷っている方がいましたら是非チャレンジしてください。信頼できる先生方や先輩方がきっと力になってくれるはずです。

最後になりましたが、このような機会を頂きましたことに深く感謝いたします。保健学科のさらなるご発展と、卒業生や在校生の益々のご活躍を切に願っております。

## 桜とともに歩む保健学専攻へ寄せて

博士課程卒業生  
福岡大学医学部看護学科 講師  
**坂梨 左織**



保健学科設立20周年を心よりお慶び申し上げます。私は現在、福岡大学で看護基礎教育に携わりながら、恩師である藤田君支先生のもと共同研究員として活動をさせていただいています。

博士後期課程を修了した2020年にCOVID-19が世界的に大流行し、これを機に教育・研究の流れが大きく変わりました。フィールドでの研究活動を行っていた私は、新たな方策を模索する中で、その解決の糸口が保健学専攻での7年間にあることに気づかされました。

旧校舎で学んだ修士課程では、指導教官である大池美也子先生から、様々な「問い」を頂き、それを追求することで研究者としての基礎を養ってきました。たとえば、先生が目の前のペンを指して問われたその意味は、私の想像とは全く異なるものでした。「既成概念にとらわれない」。これは、折に触れて私が立ち返る研究者としての原点です。

修士課程修了後、再び病院キャンパスの地を踏みしめたのは、旧校舎の改装が行われている真っ只中でした。研究室に向かう通路はまるで迷路のようで、博士後期課程に至る私の道のりのようだと感じていました。藤田先生は一貫して、私が自立した看護学研究者となれるように様々な機会と示唆を与えてくださいました。特にフィンランドオウル大学で経験したディスカッ

ションは、英語力や思考力の鍛錬に繋がりました。また現地の院生らや高齢者との交流を通し、生きた知識を得ることができました。これらの経験が糧となり、国際学会の招聘講演にチャレンジするなど活動の幅を広げることができています。

今、社会は、制限や制約への鬱憤を晴らすように、種々雑多な情報に溢れています。私たち研究者は、それらの本質や可能性を見極め、実践に還元できる新しい価値を創造していくことが求められています。7年間、病院キャンパスの地で育んだ知のつぼみが、学科棟前の桜のように幾度も花開き、看護学の発展に寄与できるよう努めて参りたいと思います。最後に、この地で共に学ぶ皆様のご活躍を願うとともに、保健学科及び保健学専攻がますます発展してゆかれますことをお祈りいたします。

## 設立20周年に寄せて

修士課程卒業生  
九州大学病院総合周産期母子医療センター母性胎児部門  
**木津 朱音**



この度、九州大学医学部保健学科が20周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。

私は、平成27年4月より平成31年3月まで貴学の医学部保健学科看護学専攻に、平成31年4月より令和3年3月まで大学院医学系学府保健学専攻助産学コースに在籍しておりました。学生時代の講義では、看護職に限らず、医師をはじめとしたさまざまな職種の先生方のお話を聞く機会に恵まれ、広い視点からの医療・看護を学ぶことができました。臨床において、さまざまな職種の方と関わって看護を実践する場面はたくさんあり、その学びが生かされていることを実感しています。試験勉強や臨地実習など大変なことも多かったです。先生方の丁寧なご指導のもと、友人と励ましあって乗り越え、充実した学生生活でした。今では、病棟に実習に来られる学生さんを見るたびに懐かしさを感じながら、一生懸命な姿に私自身元気をもらっています。

私は現在、九州大学病院総合周産期母子医療センターで助産師として働いております。ハイリスクな妊産婦さんを対象とし、新しい命の誕生に喜びを感じる瞬間もあれば、悲しい場面もたくさんあります。どんな状況であっても、対象者の心に寄り添い、精神的な支えとなる先輩

方の看護を間近で見て、日々学んでいます。これからも、貴学医学部保健学科の卒業生としての自覚と責任、誇りを持ち、真摯に仕事に取り組んでまいりたいと思っております。

現在新型コロナウイルスの影響で、学生生活にたくさんの制限がなされていることと思います。限られた環境の中でも、学生の皆さんがのびのびと勉学や課外活動に取り組むことができること、1日でも早く感染が収束し、制限のない自由な学生生活を送ることができることを強く願っております。

末筆ながら、九州大学医学部保健学科のより一層のご発展、皆様方のご活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

## 診療放射線技師としてのスタート

修士課程卒業生  
済生会福岡総合病院放射線部  
**浅野 波慧**



この度は、九州大学医学部保健学科設立20周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

私は前年度、九州大学大学院医学系学府保健学専攻医用量子線科学分野修士課程を修了し、本年度から1年目の診療放射線技師として勤めています。

遡ること高校2年生の夏、私は保健学科オープンキャンパスに行きました。このときの保健学科校舎はまだ改装前でしたが、旧校舎の薄暗い雰囲気跳ね返すような先輩方の熱心な説明や充実した姿に、私もここで先輩方のように学びたい！と強く心を動かされたのを覚えています。このオープンキャンパスが九州大学入学を目標にするきっかけとなりました。それから一年の浪人を経て入学した6年前の4月、「やっとこの日が来た、ここから私の夢へ続く道が進むぞ。」と希望と期待で一杯でした。

これまで放射線学に一切触れてこなかったため、大学の授業は何もかも新しく、そして先生方が工夫を凝らした分かりやすい授業をしてくださったおかげで、日々楽しく充実した大学生活を送ることができました。大学院進学と同時に流行したCOVID-19により学生は登校不可となり、これまでのようには研究ができなくなりました。厳しい感染状況が続く中で学生の指導

をする先生方は対面授業からリモート授業に変更されるなど大変ご苦労されたと存じます。しかしリモート授業でなければできない講義や交流会を数多く開いてくださり、貴重な経験をさせていただきました。

私は今年度、将来の夢であった診療放射線技師としてのキャリアをスタートすることができました。診療放射線技師としてはまだまだ未熟者で、日々の業務に精一杯ではありますが、学生生活6年間を通して学んだことを存分に活用し、臨床の現場から医療に貢献したく存じます。

改めて研究室でご指導いただいた藪内先生をはじめ、これまで関わってくださった先生方に心より感謝申し上げます。九州大学医学部保健学科のより一層のご発展を心よりお祈り申し上げます。

## 大切にしたいもの

修士課程卒業生  
東京大学医学部附属病院病理部  
**中島 海**



このたびは保健学科の20周年を迎えられた事、心よりお慶び申し上げます

「もしかして検査専攻の方ですか？」私にとって、九州大学医学部保健学科でのスタートは入学式の数日前、健康診断のレントゲン車内でかけられたこの一言でした。

私は今年3月に保健学修士課程を修了し、現在東京大学医学部附属病院病理部で検査技師として勤務しています。勤務するうえで私が保健学科に所属し得たものの大きさ、保健学科で学生生活を過ごせたことのありがたみを実感しています。

保健学科で過ごした6年間は勉強、部活、サークル、実習、バイトに追われてあっという間に過ぎていきました。一番大変だったのは勉強でテスト前には友人たちと図書館で毎日終電の時間まで勉強したことを今でも覚えています。その当時は本当に大変でしたが、今考えるとそのすべてが自身の糧になっていると感じています。

現在の勤務では通常の業務に加えて検討なども行っているため、修士の二年間で行った研究の基礎が役に立っています。また、修士課程の間には病理部での研修にも参加させていただくことができました。実際の業務をみて経験できたことは、今の業務を行う上で大きな助けとなっています。これらの経験は、研究するための設

備や附属病院があり、検査学をリードしている先生方のご指導があったからこそできたもので九州大学保健学専攻で学生生活を過ごせて本当によかったです。

このようにたくさんものを得ることができた6年間でしたが、私にとって保健学科で過ごしてよかったと思わせてくれる一番大切なものは、いつも一緒につらいことを乗り越えて、楽しく学生生活を過ごした友人たちです。

私に初めて話しかけてくれた友人をふくめ、検査専攻で出会った友人とは今でも頻りに連絡を取り合って定期的に会っており、私にとって本当に大切にかけがえのないものになっています。私にとっての友人たちのように、在学生やこれから入学される皆さんが保健学科で何か1つでも大切にできるものを見つけられること、また九州大学保健学科のさらなる発展とご活躍をお祈りいたします。

## 私の母校:KU～20周年を迎えて～

医療技術系教育者・研究者養成コース 博士課程卒業生  
韓国東西大学放射線学科 学科長

YOON YONGSU



こんにちは、韓国東西大学のユン ヨンスと申します。この度、九州大学医学部保健学科の20周年を迎え、寄稿することになり大変光栄で嬉しく思っております。寄稿の依頼を受けた時に、私が受けさせて頂いても良いか悩みましたが、私の人生は九大を除くと成り立たないと思ひ、勇気を出して寄稿文を書こうと決心しました。

私には2つの母校があります。学士、修士学位は韓国の高麗大学校（Korea University）で、博士号は日本の九州大学（Kyushu University）で取得しました。私が放射線技術科学分野への第一歩を踏み出した場所は韓国のKUですが、教育者、研究者として成長させて頂いた場所は日本のKUだと信じています。

私は2007年の後期から1年間交換留学生として九州大学に在学しました。同期は保健学科4期生です。当時の九大には大学院修士課程が開設されたばかりで、韓国のKUには大学院がまだ開設されていない時期でした。九大で初めて“研究室”生活を体験し、先輩方の卒研に参加させて頂き実験の面白さ、そしてその結果が英語論文として出版される楽しさを味わうことが出来ました。この貴重な経験は私が韓国に戻り、修士課程へ進学するきっかけとなりました。その後、修士課程在学中にはシカゴのRSNAに発表なし

の見学で参加したことがあります。そこで九大の先輩方の英語発表を聞き、私も将来あのようにになりたいという夢を持ちました。これがモチベーションになりInternational PhD Courseで九大に戻り、その後ポスドク、助教として在職しながら教育、研究者になるための経験を多く積むことが出来ました。

上記で紹介させて頂いた私のKUライフは、日本と韓国の放射線技術科学分野の発展過程そのものだと思います。2、3年制の技術教育から、4年制のサイエンスの一つの分野として発展して来たその中心には九州大学医学部保健学科がありました。

これから向き合う20年は他の分野と比べても追い抜かれない放射線技術科学分野を目指し、研究力や国際化の面でアジアのトップ、世界をリードして行く保健学科になりますように心から応援しており、そうなることを確信しています。最後になりますが、20周年を迎えたこと、誠におめでとうございます。九大保健学科構成員みなさまの益々のご発展とご健勝をお祈り申し上げます。

## 九州大学での留学生活の魅力

医療技術系教育者・研究者養成コース 博士課程卒業生  
サトーホールディングス株式会社海外商品推進部

Tran Thi Thao Nguyen



20周年おめでとうございます。九州大学医学部保健学科の益々のご発展を祈ります。

私は医学物理における研究を行うために、日本文部科学省の奨学金で九州大学の保健学科に修士課程で留学させて頂きました。研究では難しい時もありますが、自分で考えることや勉強したことを生かして成果を出すことが好きです。修士課程では、更に医学物理について深く研究したいと考え、博士課程に進学することを決め、大学院卒業後は、日本で働くことを決め、サトーホールディングス株式会社に就職することに致しました。

初めて日本に来てから今年で9年目になります。日本に来る前に、初めて実家を離れたので、不安がたくさんありました。しかし、日本に到着すると九州大学の留学生支援センター、保健学科の学生係員、先生たちが優しく迎えてくれ、また同じ研修室の友達が大学の手続き、携帯電話の契約などを手伝ってくれたり、ご飯に誘ってくれたりして、楽しく過ごすことができました。研修室では、研究のやり方や様々な専門の知識、プログラミング言語など技術的なことを学びました。そして、勉強に集中しただけではなく、年毎に先生を含めた研究室メンバーと、みんなと一緒に旅をしたり、研究室で焼きそばパーティーしたりして、研究室メンバーと仲良

くなりました。さらに、学生生活で一番楽しかったことは様々な学会参加ができたことだと思います。写真は私の大学院時代に指導教官でもあった有村秀孝先生（写真：右）と国際学会と一緒に参加した時、発表させて頂いた時のものです。この時、最優秀発表を受賞いたしました。それは本当にいい思い出です。先生には研究を指導していただき、大変お世話になりました。最後になりますが、大事なことは、日本に実際に身を置いて日々暮らしをしていくことは、旅行などでは味わうことができない貴重な経験になるということです。日本語や日本の文化、伝統のことも理解を深めることが可能な素晴らしい機会となります。

将来的に機会があれば、保健学科の皆様と交流させていただけるようなことがあれば嬉しいです。今後ともよろしくお祈りいたします。

## 卒業後6年目を迎えて

11期卒業生  
福岡県保健医療介護部健康増進課保健事業係  
江藤 麻奈



九州大学医学部保健学科20周年おめでとうございます。私は11期生として平成25年に保健学科看護学部に入學し、保健師コースに所属しておりました。卒業してからあっという間に6年が経ち、この寄稿を書きながら、仲間と共に実習を頑張ったことや講義や実習をととして保健師を強く志したことなど大学での4年間をととても懐かしく思い出しました。

卒業後は、福岡県の保健師として就職し、保健所での勤務を経て、今年の4月より現在の所属に異動となりました。保健所では、難病や精神、感染症など様々な健康課題を抱えた方と関わり、その中で、本人や家族の思いに寄り添うことや地域にある社会資源を知り、関係機関と連携しながら支援することの大切さを学びました。地域住民と関わることは、一人ひとり、考えや思い、家族背景や生活様式などが異なり、信頼関係を築いていくことや正解がない中での支援の難しさを感じることもありましたが、それでも本人や家族の希望に寄り添うことが出来るよう、関係機関と連携して支援いくことのやりがいを感じました。また、個別の事例から地域を見つめ、地域の課題解決に向けて業務に取り組むことにも保健師としてのやりがいを感じました。

現在の所属では、地域保健従事者の人材育成を主に担当しており、保健師という専門職として

獲得すべきスキルや、そのスキルを獲得するために必要な研修を考えたりしており、保健所での業務とはまた異なった分野の中で、保健師の仕事を見つめる機会となっています。また、県庁での仕事は、全国や他県の動向に触れる機会が多く、より広域的な視点を持って業務することの大切さを知る機会にもつながっています。

このように今、保健師としての業務にやりがいを持ちながら仕事が出来ているのも、医学部保健学科での4年間があったからだと思います。まだまだ保健師としての経験は浅く、先輩や上司からご指導いただきながらではありますが、大学で学んだことやこれまでの経験を忘れずに、地域住民の健康を考え、住民に寄り添える保健師として、これからも自己研鑽に励みたいと思います。

## コロナ禍の終息を見据えて

12期卒業生  
キヤノンメディカルシステムズ株式会社  
廣瀬 智哉



新型コロナウイルス感染症が猛威をふるい、その影響が長期化している中、日々医療現場の最前線で奮闘されている医療従事者の皆様へ、心から感謝申し上げます。

この度、九州大学医学部保健学科20周年記念誌へ寄稿の機会を頂きましてありがとうございます。キヤノンメディカルシステムズの廣瀬と申します。私は卒業後すぐに現在の会社へ入社し、研修期間を経て東京にある首都圏支社 営業推進部へ配属されました。現在はCT装置を専門に、神奈川県および山梨県の医療機関を担当しております。入社当時は臨床経験なく入社したこともあり知識が追いつかない部分が多々ありました。学生時代の授業や実験、病院実習、研究等は非常に貴重な機会であったということを実感し、もっと一生懸命に取り組めばよかったと後悔しているところです（笑）そんな私ではございますが、多くの学会・セミナーが開催される首都圏という地域柄や、日常診療や研究を非常に熱心にされている各科の先生方・診療放射線技師の方々との出会いに恵まれて、多くのことを学ばせていただき、医療へ貢献できている実感を得ながら日々の業務に取り組んでおります。

この数年間は新型コロナウイルス感染症が世界的に猛威をふるい、皆様におかれましても非

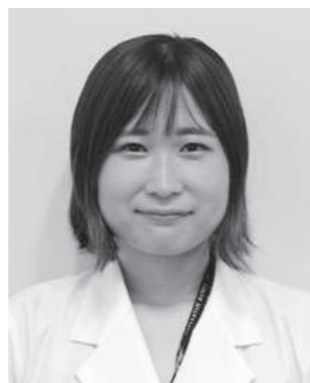
常にもどかしく窮屈な思いをされたのではないかと思います。一方で、ここ最近では少しずつコロナ禍以前の日常が戻ってきているように感じています。先日は福岡市内で催された保健学科の同期の結婚式に参列いたしました。卒業してからなかなか会う機会のなかった同期の友人と久しぶりに集まることができ、各々の近況を共有しながら昔話を花を咲かせ、とても充実した時間を過ごすことができました。学会等でも、コロナ禍以前のように抄録で見覚えのあるお名前をお見かけしたり実際にお会いしたりできる機会も増えてきて、皆様から刺激をいただくことができいております。

まだまだ完全に元通りとはいかない状況ではございますが、コロナ禍が終息し、以前のように4月になれば横浜で同窓の皆様とお会いできる、そのような日が近くやってくることを心より楽しみにしております。

## 馬出に思いを馳せて

13期卒業生  
千葉大学大学院医学研究院法医学 技術補佐員

田邊 真優



九州大学医学部保健学科創立20周年誠におめでとうございます。心よりお慶び申し上げます。

私は2015年4月に検査技術科学専攻13期生として九州大学に入学致しました。1年次には主に自然豊かな伊都キャンパスを、2年次以降からは都市部に近い馬出キャンパスを学び舎としました。1年次では毎週木曜日に重い解剖学の教科書を抱え、馬出キャンパスに伊都よりはるばる通っていたものです。中でも思い出深いのは1年生のゴールデンウィーク明け、保健学科一同が大学生よろしくだらけ始めていた頃に解剖学の先生が授業開始直後に言い放った「君たち、来年からの1年生は毎週木曜日に伊都から通うことはしないから、この単位を落とすと自動的に2年留年ですからね」という衝撃発言です。その日の授業ばかりは、保健学科一同が机にかじりつくように懸命に取り組んでいたのを今でも鮮明に思い出せます。

さて、私事ですが、私は幼少の頃より解剖に大変興味があり、解剖に関わる職に就くことを夢見ておりました。在学時には保健学科の多くの先生方に様々な機会やご助言を頂き、今私は念願の法医学教室において、解剖の介助やご遺体の死因決定に関わる検査などに携わっております。保健学科でのかけがえのない経験によって、これからも多くの学生が自分の夢を叶え、ご活

躍されることを切に願っております。

重ね重ねではございますが、この度は20周年誠におめでとうございます。馬出の学食で食べた小エビ天ぷらうどんの美味しさは忘れられず、今でも恋しく思うときが少なくありません。最後になりますが、九州大学医学部保健学科の益々のご発展をお祈り申し上げます。

## 20周年を祝して

14期卒業生  
九州大学病院看護部

河野 杏奈



九州大学医学部保健学科創立20周年おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

私は14期生として、平成28年に九州大学医学部保健学科看護学専攻に入学しました。1年生の時、伊都キャンパスで基幹教育として文化人類学や心理学、芸術学などを学びました。他学部生と多様な分野の学問を共に学ぶことができたことは、自分の価値観を広げるための新しい基盤を築いた非常に実りのある時間になりました。

2年生になると病院キャンパスで看護学専攻の授業が始まりました。看護学だけでなく解剖生理学や病理学など学ぶ内容の多さと密度の濃さに圧倒されました。看護技術学ではツンとした消毒液のにおいがする演習室で、バイタルサインや洗髪、清拭を学生同士で行っていたことが懐かしく思い出されます。

3年生の夏から、小児看護学実習を契機に、学生生活の中で一番印象に残った臨地実習が始まりました。日々の記録や看護計画立案などの時間に追われ、眠れないまま朝が来たという日も多くありました。患者さんとご家族の抱えている気持ちを目の当たりにし、同じ実習グループの仲間と涙した日もありました。病院、クリニック、介護施設など様々な場所での看護を学ぶ機会を得ることができ、有意義な実習を送る

ことができたのは看護学専攻の先生方が寄り添い、支えてくださったおかげです。この場をお借りして御礼申し上げます。

現在は、九州大学病院のウエストウイング1階病棟に勤めて3年目になります。ウエストウイング1階病棟は精神科の病棟で、統合失調症、双極性障害、強迫性障害などの疾患をもつ患者さんが入院されています。まだまだ看護師としての経験が浅く、患者さんの全体像を把握してアセスメントすることの難しさを感じる場面も多いですが、患者さんや先輩看護師の方々に支えてもらいながら充実した日々を送っています。今後も自己研鑽を続け、看護者としての自分を確立していきたいと思っております。

最後に、九州大学医学部保健学科の今後ますますのご発展を心より祈念申し上げ、お祝いのごことばといたします。

## 診療放射線技師としての自己成長につながる大学生活の過ごし方

15期卒業生  
九州大学病院放射線部門

園川 実歩



この度は、九州大学医学部保健学科の創立20周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

現在、私は九州大学病院にて診療放射線技師として日々業務に励んでおります。4年間の学生生活だけでなく就職活動に関しましてもご教授くださった保健学科の先生方には深く感謝しております。

思い返してみると、入学した当初は九州大学病院で働めることができるとは想像もしていませんでした。大学1年生の4月に病院キャンパスを訪れ、九州大学病院見学にて現在は直属の先輩である九州大学病院の診療放射線技師の方々の働く姿を拝見させていただきました。入学してすぐに医療施設を見学できたことは有益な体験となり、今後の大学生活の中で学ぶ意欲を高めることができました。

大学を卒業し診療放射線技師となった今でも学び続ける日々を送っております。先日、福岡マンモグラフィ技術講習会を受講いたしました。講習会1日目はポジショニング実習やマンモグラフィ品質管理についての講習、2日目は読影試験および筆記試験が行われました。試験勉強をする中で気付いたことがありました。患者撮影や定期点検の実施などの臨床の経験が活かされるのはもちろんですが、大学で学んだ診療画像

機器学や医用画像評価学の知識がとても役に立ちました。マンモグラフィの分野に限らず、第一種放射線取扱主任者試験や他モダリティの認定資格においても同様に、放射線技術科学専攻で学んだ知識が基礎となるのだと思います。

私の大学生活は有意義なものでした。大学で知り合った友人とは卒業した今でも連絡を取り合っています。同じ職業に就いているからこそ共感できることが多くあり、会うたびに話は尽きません。かけがえのない友人や親身にご教授くださった先生方と出会い、その中で得られた知識や経験は今に活かされています。今後も大学生活の中で学んだことを活かし、診療放射線技師として更に成長できるよう精進して参ります。

最後になりましたが、母校である九州大学医学部保健学科の一層のご発展を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

## 九州大学で過ごした4年間で振り返って

16期卒業生  
済生会熊本病院中央検査部

宮本 麻希



九州大学で過ごした4年間は、自分で考えて行動する力を伸ばすことができた期間だと考える。大学生活では履修する授業を選択する、授業外で自由に使える時間が増える、など個人の選択次第で活動の幅を広げられる環境にあったといえる。大学生活で印象に残っていることを3つ挙げる。

1つ目は、学部2年生のときに参加したグローバルリーダー育成の研修プログラムだ。自ら応募した研修であり、社会人との交流やマンマー、マレーシア訪問など海外の文化に触れた貴重な経験になった。

2つ目は、コロナ禍での学生生活だ。学部3年生では授業がいつ再開されるかわからない状態であり、先生方や友人と直接話す機会が極端に減った。環境の変化に不安を覚えた一方で、オンライン授業で理解度を高めるためにはどのようにすれば良いか、自分の勉強法を見直すきっかけにもなった。学習法の見直しは、国家試験に向けての勉強にも活かされたといえる。

3つ目は、学部4年生のときに行った九州大学病院での実習だ。業務内容や使用機器を見学し、病院で働くイメージをつかむ機会にもなった。臨床の検査結果を見て、どのような症例であるか判断する課題があった。現場の技師の方に直接質問しながら学生同士で症例検討できた

ことから知識を深められたといえる。九州大学病院規模の検査室で学生実習できた学習環境にとっても感謝している。私が現在所属する病院との検査数や機器の違いなど病院の特色も知ることができた。

九州大学入学を志していたころは、自身が新型コロナウイルス感染症の検査に携わるとは想像もしていなかった。しかし、このような状況に直面しているからこそ改めて、臨床検査技師として医療に貢献していることを実感できている。学生時代に多くの経験に触れ、環境の変化に応じ、現状に最善の行動は何かと考える能力を高められたと考える。今後は、これまで培った力を活かすことはもちろん、発展し続ける医療技術に追いつけるよう、自分の知識もより高め、臨床検査技師としての幅を広げたい。最後に、大学での学習を支えてくださった先生方、困難とともに乗り越えてきた友人に感謝申し上げます。

## 保健学科20周年を迎えて

17期生

大城戸 未来



九州大学医学部保健学科20周年、おめでとうございます。長かったような短かったような4年間の大学生活も残すところ数ヶ月となりました。

伊都で過ごした1年間は、初めての経験ばかりでしたが、友人や環境に恵まれ楽しい毎日だったことを覚えています。馬出キャンパスでの新しい日々が始まろうとした頃、COVID-19の流行により想像もしていなかった生活が始まりました。一人で過ごす日々は辛く、つまらない毎日でした。私は“人の役に立ちたい、苦しんでいる人の傍に寄り添いたい”という思いから看護師をめざしましたが、コロナ禍で学校にも行けず夢を見失いそうになったこともありましたが、しかし、医療崩壊している現実を目の当たりにし、何も出来ない自分に無力さを感じるとともに看護師としてはやく働きたいという思いが強くなりました。講義は遠隔が多かったものの、看護学分野で有名な先生方や現役看護師から九州大学でしか学べないような充実した講義を受け、より高度な知識を習得することができました。

コロナ禍の中始まった大学病院での臨地実習は私の一番の思い出です。制限はあったものの、最先端の病院で患者様を受け持たせて頂き、同じ夢に向かって頑張る友人たちと切磋琢磨しな

がら実習に臨めたことは本当に有難く、大きな経験となりました。コミュニケーションに悩んだり自信を無くしたりと不安も多くありましたが、初めて受け持たせて頂いた患者様からの「あなたでよかった、本当にありがとう。あなたなら素敵な看護師になれる。」という言葉は私にとって何よりの宝物となり、原動力となりました。実習を通して看護に必要な知識や技術だけでなく、患者様への寄り添い方や観察力など沢山の事を学び、大きく成長することができたと感じています。

春から私は社会人として働くこととなります。社会人は、これまで経験してきたことの何倍もきつく大変な事があるかもしれません。しかし、大学で得た豊富な知識や共に支え合った友人、臨地実習での経験はこれからの私の糧となり続けると思います。そして、患者様一人ひとりの思いに寄り添い、一人でも多くの人を安心させられる看護師になれるよう努力し続けたいと思います。今後の九州大学医学部保健学科の益々の発展を祈っています。

## 20周年を迎えて

18期生

政木 結衣



この度は保健学科の設立20周年を迎えられたこと、心よりお祝い申し上げます。そして、保健学科20周年記念誌に寄稿文を掲載させていただけることをとても光榮に思います。

私は新型コロナウイルスの流行が到来した2020年4月に本学に入学しました。そのため、授業の一部がオンライン授業である状況が続いていました。しかし、この保健学科での3年間を通じて、学習を進めるごとに自分の未来の可能性が日を追うごとに大きくなっていることを実感します。それは、診療放射線技師の資格を持ち臨床経験を積んだ先生方による講義をはじめとして、企業セミナーやオンライン学会への参加など、講義の他にも多くのことを経験させていただいているからです。このことは九州大学にいるからこそできるの経験だと思います。非常に恵まれた環境で学習することができており、毎日がとても楽しいです。

日々の講義や実験では、先生方は講義の内容だけではなく臨床での経験、他の知識とどのようにつながってくるかなどを教示されます。丁寧で分かりやすい講義のおかげで、主体的に学びを深めることができます。また、西新プラザで行われた研修セミナーでは、先輩方の経験や先生方の研究内容を知ることができました。この研修を通じて先生方の研究内容に興味を深ま

りました。今後の学習や先生方との交流の中で自分が研究したいことを明確にすることが、今の自分の目標です。

4年生になると九州大学での病院実習が始まります。この実習で私たちは、これまでの講義で得た知識を臨床で実践し、患者さんとの接し方など多くのことを学びます。診療放射線技師として働くために必要な知識や接遇を、実習での経験を通して吸収していきたいです。

1年後私は、九州大学を卒業します。現時点で卒業後どのような進路を選ぶのかはまだ決まっていません。しかし、九州大学で学んだことを生かし、柔軟な思考や行動のできる社会人を目指します。将来自分がどのようなことに取り組むのかなど、私なりの「放射線」との関わり方を探求していきたいです。そして、放射線を通じて医療や科学の発展に寄与する1人になりたいです。



## 20周年を迎えて

19期生  
百田 葵

九州大学医学部保健学科、創立20周年おめでとうございます。心からお慶び申し上げます。

私が九州大学に入学して早くも2年が経とうとしています。親身にご指導くださる先生方に恵まれ、充実した環境設備で学ぶことができ、何より志高き仲間たちと出会えたことに大変幸せだと実感する毎日です。

1年次には伊都キャンパスにて医系分野だけでなく、文系分野、総合科目といった教養科目を学び、今後学習する上での基礎的知識あるいは問題解決に向けた多面的・多角的視点を養うことができました。慣れない大学生活、そしてコロナ禍という仲間に出会うことすらままならない状況の中、お互い情報を共有し、また鼓舞し合うことで乗り越えてきました。そんな日々も束の間、キャンパスを馬出に移し、いよいよ専門的な内容の授業に入っていました。2年次の初回講義にて1コマにおける内容の多さに驚愕したことは言うまでもありません。私だけでなく、同期の仲間たちも焦燥に駆られ、先生方、先輩方に何度も相談していました。2年生の後期が始まった今、日々の生活にも慣れ目を追うごとに医学の奥深さを実感し、将来への期待に胸を膨らませるばかりです。

今の私の将来の希望は、検査技師が第一ではありません。今後大学の講義で学んだ内容を使

うことはないかもしれませんが。しかし社会に出たときに、大学4年間で学んだ論理的な思考やアプローチが自分にとって大きな自信になるだろうと考えています。大学生活の中で少しでも多くのことを経験し吸収し自分の糧になるよう、限られた日々を大切にしていきたいです。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった先生方、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。並びに今後の九州大学医学部保健学科の益々の発展をご祈念申し上げまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

九州大学医学部保健学科  
創立20周年記念を祝して20期生  
萩田 ひまり

この度は九州大学医学部保健学科創立20周年を心よりお祝い申し上げます。

私はこの記念すべき20周年に20期生として入学できたことを非常に嬉しく思います。まだ入学して半年余りですが、多くの心温かな先生方や勉学を共にする仲間に出会い、毎日充実した学生生活を送っています。現在は主に伊都キャンパスに通っているため、来年からの病院キャンパスでの講義や実習に心寄せています。

ここ九州大学医学部保健学科では入学当初から看護学に触れることができ、私自身まだ入学して間もないですが、すでにこの夏、看護学会にボランティアとして参加させていただきました。医学会のスペシャリストである先生方からのお話はとても詳細で刺激的な内容でした。しかし、医学についてまだ十分な知識を得ていない私にとっては多々難しい内容でもありました。そのため、この学会は私にとってこれからの勉学への意欲向上につながりました。このように九州大学医学部保健学科では、学生の勉学への意欲向上を図ることができる様々な機会が提供されているため、常に高い志を持って学生生活を送ることができます。

今後は、「広い見識と深い人間理解を基盤とし、人の健康と幸せに貢献する人材を育成する」という教育理念のもとに、日々の講義や実習だけで

なく積極的に学会などの課外活動に参加し、多くの医療界のスペシャリストの皆様のお話から十分な知識や見識を吸収しながら医療者としての今後のキャリアを考えていきたいと思っています。また、部活動やサークル活動、課外活動、看護実習など人との触れ合いを通して豊かな人間性を育むことや学生生活を自分の将来の選択に役立てるために、何事にも挑戦することを大切にしていきたいと考えています。

最後になりましたが、これからの九州大学医学部保健学科の益々のご発展を祈念申し上げます。

20周年教員集合写真



教員一同(令和4年9月)



## 4-2) 国際化の実績

## 1. 部局間交流協定

所属	締結～期間満了/年月日	概要
部門	平成17年 9月 8日～平成22年 9月 7日	シカゴ大学放射線科カートロスマン放射線像研究所 (アメリカ合衆国 イリノイ州 シカゴ)
看護	平成22年11月22日～平成27年11月21日	ニューヨーク市立大学ハンター校ハンターベルビュー看護学部 (アメリカ合衆国 ニューヨーク)
	平成24年10月 1日～令和 4年 9月30日	高雄医学大学看護学部(台湾 高雄市)
	平成29年 7月25日～令和 4年 3月31日	香港大学看護学部(香港)
	平成30年 3月28日～令和 5年 3月31日	オウル大学医学部(フィンランド オウル市)
放射	令和 2年 2月 7日～令和 7年 2月 6日	高麗大学保健科学大学(韓国 ソウル特別市)

## 2. 外国講師講演会

所属	年月日	概要
部門	平成24年度	Robert M Nishikawa, Ph.D.(米国・シカゴ大学)
看護	平成24年度	Dr. Fan Hao Chou(台湾・高雄医学大学), Dr. Merle(米国・ハワイ大学)
放射	平成24年度	Dr. Maryellen L Giger(米国・シカゴ大学)
看護	平成25年度	Dr. Yang(台湾・高雄医学大学)
看護	平成26年度	Prof. Yajai Sitthimongkol(台湾・高雄医学大学)
放射	平成26年度	Dr. Yudthaphon Vichianin(タイ・マヒドン大学)
検査	平成26年度	Dr. Daisuke Mori(マレーシア・サバ大学)
看護	平成29年度	Assoc. Prof. Fu-Chih Lai(台湾・台北医科大学) Assoc. Prof. Pirjo Kaakinen, Lecturer, Heidi Siira(フィンランド・オウル大学)
放射	平成29年度	Dr. Picha Shunhavanich(タイ・チュラロンコン大学)
検査	平成29年度	Dr. Teppei Matsubara(米国・ハーバード大学)
部門	令和元年度	Assoc. Prof. Aurawamon Sriyuktasuth(タイ・マヒドン大学), Prof. Jongtae Lee(韓国・高麗大学校), Prof. Kamruddin Ahmed(マレーシア・サバ大学)
看護	令和元年度	Prof. Maria Kääriäinen, Prof. Helvi Kyngäs(フィンランド・オウル大学) Assoc. Prof. Kristina Mikkonen(フィンランド・オウル大学)
看護	令和3年度	Lecture. Heidi Siira Assoc. Prof. Pirjo Kaakinen(フィンランド・オウル大学) オンライン国際セミナー

## 3. 保健学国際フォーラム(特別講演)

所属	年月日	概要
部門	平成26年度	「保健医療福祉のグローバル化と日本社会」 平野裕子先生(長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授)
	平成27年度	「My message to all of you interested in global health」 尾身茂先生(独立行政法人地域医療機能推進機構理事長)
	平成28年度	「In Relationships with Others and with the World: Unlearnin“Learning”」 和栗百恵先生(福岡女子大学国際文理学部准教授)
	平成29年度	「Understanding yourself in Our Times: Towards a Global Healthcare Expert」 肥後裕輝先生(九州大学留学生センター教授)

所属	年月日	概要
部門	平成30年度	「The Arctic in the Globalized World: Climate Change, Indigenous People, and Medical Care」 生田博子先生(九州大学留学センター)
	令和元年度	「Lessons learned from Global Experiences How can we link Local/Global Health?」 横田文彦先生(九州大学アジアオセアニア研究推進部門准教授)
	令和2年度	「Telemedicine in Asia and beyond: Benefits and challenges」 清水周次先生(九州大学病院国際医療部教授)
	令和3年度	「International Cooperation in Practice: Some examples of JICA's operation in health sector」 高城元生先生(九州大学国際戦略企画室特任教授)

## 4. 保健学国際フォーラム(Student Meeting)

所属	年月日	概要
看護	平成24年度	Prof. Chich-Hsiu Hung(Kaohsiung Medical Univ)
	平成25年度	As. Prof. Lih-Mih Chen(台湾・高雄医学大学)
	平成26年度	As. Prof. Li-Min Wu(台湾・高雄医学大学)
	平成27年度	As. Prof. Yi Liu(台湾・高雄医学大学)
	平成28年度	Dr. Merle Kataoka-Yahiro(University of Hawaii), Dr. Fan Hao Chou(台湾・高雄医学大学)
	平成28年度	Dr. Ruttanaporn Konger(タイ・マヒドン大学)
	平成29年度	Dr. Ya-Ping Yang(Kaohsiung Medical University), Dr. Yun Hamsun(Kyungshung University)
	平成30年度	Prof. Yajai Sitthimongkol(タイ・マヒドン大学)
	令和元年度	Prof. Chia-Chin Lin(香港大学), Prof. Kelvin Man Ping Wang(香港大学), Prof. Ihn Sook Jeong(釜山大学)
	令和2年度(WEB)	As. Prof. Ruttanaporn Kongkar(タイ・マヒドン大学)
	令和3年度(WEB)	Prof. Fu Chih Lai(台北医科大学)
放射	平成24年度	Prof. Seung Jae Huh(Samsung Medical Center)
	平成25年度	As. Prof. Chun-Wei Li(台湾・高雄医学大学)
	平成26年度	Prof. Kim Jung Min(Korea University)
	平成28年度	Prof. Kwan Hoong N(マレーシア・マラヤ大学)
	平成29年度	Dr. Chai-Hong Yeong(マレーシア・マラヤ大学)
	平成30年度	Prof. Weihai ZHUO(Fudan University)
	令和2年度(WEB)	Prof. Kwan Hoong N(マレーシア・マラヤ大学)
	令和3年度(WEB)	Dr. Picha Shunhavanich(タイ・チュラロンコン大学)
検査	平成24年度	Angela Koh(Khoo Teck Puat Hosp)
	平成25年度	As. Prof. Ching-Shuang Wu(台湾・高雄医学大学)
	平成28年度	Prof. Mehmet Bülent ÖZDEMİR(トルコ・バムツカレ大学)
	平成30年度	Dr. DAISUKE MORI(マレーシア国立サバ大学)
	令和元年度	Prof. Arnold Pineda(フィリピン・アンヘレス大学)
	令和2年度(WEB)	Prof. Mehmet Bülent ÖZDEMİR(トルコ・バムツカレ大学)
	令和3年度(WEB)	Dr. Teppei Matsubara(米国・ハーバード大学)

## 5. 教員の海外派遣

所属	年月日	概要
部門	平成24年度	ハンターベルビュー看護学校(米国): 宮園、木下由 大学院教育の実践及び研究活動の体験、教授法、研究指導法の研修 高雄医学大学(台湾): 平田、佐々木雅、熊澤、杉島、勝田、外園、川本、鳩野 EEP活動 本学における教育・研究概要について説明
看護	平成24年度	高雄医学大学(台湾): 川本、大池、木下義 学長との面会、情報交換、保健学教育について意見交換 インドネシア大学(インドネシア): 梶木、橋口 九州大学のG30プログラム紹介 インドネシア大学(インドネシア): 木下義 小児医療に関する講演実施、医療技術提供などの国際交流 高雄医学大学(台湾): 川本 部局間学術協定・学生交流締結、講義、大学施設・病院見学 高雄医学大学(台湾): 木下義、藤田紋、2年生4名 Student Meeting Exchange programによる交流
検査	平成24年度	マヒドン大学(タイ): 梅村、勝田 セミナー開催 日本学術振興会(JSPS)バンコク研究連絡センター: 留学生に対する助成、マヒドン大学(タイ)サラセミア研究センターおよび同熱帯医学部との今後の研究交流の推進について情報交換
看護	平成25年度	高雄医学大学(台湾): 谷口、木下義、道面、看護学専攻2年生2名、3年生1名 Student Meeting Exchange programによる交流、G30プログラムの紹介 高雄医学大学(台湾): 中尾、梶木、谷口 開設50周年記念式典に参列し、学部・院生へ講義 ハンターベルビュー看護学校(米国): 中尾、谷口、宮園 部門間協定確認と継続、Bellevue hospitalシミュレーションセンター視察
放射	平成25年度	高雄医学大学(台湾): 有村、熊澤、藤淵、吉田 留学生リクルート、部局間交流協定の締結準備
検査	平成25年度	高雄医学大学(台湾): 杉島、栢森、水上 留学生リクルート、共同研究打ち合わせ Khoo Teck Puat Hospital(シンガポール): 勝田 留学生リクルート、共同研究打ち合わせ
部門	平成26年度	高雄医学大学(台湾): 大喜、加来、末次、梶原、看護学専攻2年生4名 Student Meeting Exchange programによる交流
看護	平成26年度	マヒドン大学(タイ): 谷口、原田、前野有 交流プログラム創設に向けた教育内容、学生生活について意見交換 モナシュ大学(オーストラリア): 中尾、鳩野、寺岡 部局間協定設立準備と留学生確保の大学案内、交流プログラム創設に向けた検討、教育事情意見交換 ハワイ大学(米国): 谷口、梶木、藤田君、能登 交流プログラムの検討、シミュレーション教育および学生生活の実態把握、周辺の医療施設環境の把握 高雄医学大学(台湾): 藤田君、濱田 国際交流についての意見交換、講義実施
放射	平成26年度	Nanyang Technological University, National Cancer Centre(シンガポール): 有村 講演実施、留学生リクルート マヒドン大学(タイ): 高橋 留学生リクルート 高麗大学校(韓国): 納富 留学生リクルート 高麗医科大学(台湾): 熊澤 特別講義のため招聘

所属	年月日	概要
看護	平成27年度	ハワイ大学(米国): 谷口 学生間国際交流推進を目的とした意見交換 高雄医学大学(台湾): 木下由 学生間、教員間の学術交流推進 マヒドン大学(タイ): 大池、金岡 学生交流プログラムの実現化に向けて意見交換 高雄医学大学(台湾): 小野、橋口 国際交流についての意見交換、講義実施
放射	平成27年度	マヒドン大学(タイ)・チュラロンコン大学(タイ): 佐々木雅、杜下、藤淵、三輪、大学院生8名 留学生リクルート
看護	平成28年度	高雄医学大学(台湾): 川田、野口 学生間国際交流推進を目的とした意見交換 マヒドン大学(タイ): 谷口、鳩野 学生交流プログラムの実現化に向けて意見交換
放射	平成28年度	バンドン工科大学(インドネシア): 有村 九大の紹介、研究交流(WEB) ベトナム国立大学科学大学(ベトナム): 佐々木雅、藪内、有村 先端医用量子線技術科学に関する国際シンポジウム開催、九大の紹介、研究交流(WEB) 高麗大学校(韓国): 藪内、藤淵 今後の学術研究と両校の交流について協議
看護	平成29年度	香港大学(中国): 谷口、橋口 看護学国際フォーラム共催 オウル大学(フィンランド): 鳩野、藤田、橋口 部局間協定締結 国際交流意見交換
放射	平成29年度	ディボネグロ大学、サチャ・ワカナ・キリスト大学、バンドン工科大学(インドネシア): 有村、藤淵 留学生リクルート チュラロンコン大学、マヒドン大学(タイ): 藪内、佐々木智、藤淵 留学生リクルート
看護	平成30年度	マヒドン大学(タイ): 梶木、橋口 国際医療と連携のQRプロジェクトおよびNEEPについての今後の活動について討議 香港大学(中国): 谷口、橋口 看護学国際フォーラム共催
放射	平成30年度	マラヤ大学(マレーシア): 有村 学部生対象の講義、留学生リクルート 東西大学(韓国): ユン、河窪 学術協定締結に関する調査、学部生対象の講義、交換留学・留学生リクルート、教育・研究の意見交換 高麗大学校(韓国): 有村、ユン 交換留学・留学生リクルート、学部生・大学院生対象の講義、教育・研究の意見交換 ディボネグロ大学(インドネシア): 藤淵、大学院生3名 情報収集、意見交換
看護	令和元年度	台北医学大学(台湾): 鳩野、橋口 研究施設や教育施設の見学、短期交換留学実施に向けたプログラム内容の打ち合わせ マヒドン大学(タイ): 後藤 マヒドン大学主催 国際学会招待講師
検査	令和元年度	国立サバ大学(マレーシア): 相原、外園 研究施設や教育施設の見学、本学の教育システム、現在の研究について紹介

## 6. 外国教員の招聘

所属	年月日	概要
看護	平成24年度	ニューヨーク市立大学(米国): Dr. Kathleen Nokes, Dorothy Hickey 特別講演及び研究指導、視察等  高雄医学大学(台湾): 余幸司(Dr. Hsin-Su Yu)学長 大学間連携協定の打ち合わせ、大学施設見学、視察・交流  高雄医学大学(台湾): Dr. Hsiu Hung Wang, Dr. Ruey-Hsia Wang, Dr. Mei-Shang Yang 大学間連携協定の打ち合わせ、大学施設見学、視察・交流
看護	平成26年度	高雄医学大学(台湾): Dr. Li-Min Wu 九州大学病院、地域行政など見学、講義参加、国際交流の意見交換
放射	平成26年度	高麗大学校(韓国): 金正敏教授 教員の受入: 平成26年10月1日～平成27年1月31日
看護	平成27年度	高雄医学大学(台湾): Dr. Chen Lih-mih、学生9名 Student Meeting Exchange programによる交流として、学内施設見学、地域行政等で見学実習、講義の参加、学生間の意見交換
放射	平成29年度	高麗大学校(韓国): 教員7名 研究会開催
看護	令和元年度	台北医学大学(台湾): Dr. Megan Liu 看護学教育における国際交流について情報交換  台北医学大学(台湾): 蔡教授、訪問団 今後の国際交流についての意見交換  高雄医学大学: Assoc. Prof. CHANG-CHIH KUO 看護学教育・研究における国際交流について意見交換  マヒドン大学(タイ): Dr. Thitipong 留学生に同行および特別講義、シンポジウム参加
検査	令和元年度	台北医科大学(台湾): 学生2名 専門領域の授業や研究に関する紹介。学外見学として日赤血液センターやCRC検査センターを訪問

## 7. 学生の海外派遣

所属	年月日	概要
看護	平成24年度	高雄医学大学(台湾): 4名
看護	平成25年度	高雄医学大学(台湾): 3名 高雄医学大学(台湾): 4名
看護	平成28年度	マヒドン大学(タイ): 3名、高雄医学大学(台湾): 2名・約2週間
放射	平成28年度	高麗大学校(韓国): 1名・約1年、3名・約1ヶ月、国立清華大学(台湾): 2名・約1ヶ月、 チュラロンコン大学(タイ): 3名・約1ヶ月
看護	平成29年度	マヒドン大学(タイ): 2名、高雄医学大学(台湾): 3名、香港大学(中国): 3名・約2週間
放射	平成29年度	高麗大学校(韓国): 3名・約1ヶ月、国立清華大学(台湾): 1名・約1ヶ月、 マヒドン大学(タイ): 1名・約2週間、チュラロンコン大学(タイ): 1名・約2週間
看護	平成30年度	マヒドン大学(タイ): 2名、高雄医学大学(台湾): 2名・2週間、香港大学(中国): 2名・10日間 モンゴル助産師会(修士助産学コース): 2名・7日間 オウル大学(フィンランド): 博士課程大学院生5名・8日間
放射	平成30年度	マラヤ大学(マレーシア): 1名、国立清華大学(台湾): 1名、チュラロンコン大学(タイ): 2名・2週間

所属	年月日	概要
看護	令和元年度	マヒドン大学(タイ): 学部3年生1名、2年生1名 Exchange Program参加
放射	令和元年度	高麗大学(韓国): 3名・15日間  マヒドン大学(タイ): 3名・12日間  台湾国立精華大学(台湾): 1名・21日間  台湾国立精華大学(台湾): 1名・33日間  慶熙大学校原子炉センター(韓国): 研究生1名・4日間
検査	令和元年度	マラヤ大学(マレーシア): 1名・ASEAN in Today's World 2020
看護	令和3年度	マヒドン大学(タイ)サマーコース: 3名 オンラインプログラム参加

## 8. 留学生の受入

所属	年月日	概要
看護	平成25年度	高雄医学大学(台湾): 2名
看護	平成26年度	高雄医学大学(台湾): 11名
放射	平成26年度	バンドン工科大学(インドネシア): 1名・3ヶ月半 高精度放射線治療に関する研究のため  マヒドン大学(タイ): 2名・4ヶ月間 コンピュータ支援診断に関する研究のため
看護	平成28年度	マヒドン大学(タイ): 2名、高雄医学大学(台湾): 8名・約2週間
放射	平成28年度	マヒドン大学(タイ): 4名・約1ヶ月間、 Bandung Institute of Technology(インドネシア): 3名・約4ヶ月間
看護	平成29年度	マヒドン大学(タイ): 2名・2週間
放射	平成29年度	修士1名(医用量子〔保健学国際コース〕)私費留学・1年間 博士1名(医用量子〔保健学国際コース〕)文科省国費留学・1年間
看護	平成30年度	香港大学(中国): 3名、高雄医学大学(台湾): 2名、マヒドン大学(タイ): 2名、計7名・15日間
看護	令和元年度	マヒドン大学(タイ): 4名、高雄医学大学(台湾): 2名、香港大学(中国): 3名、計9名
放射	令和元年度	マヒドン大学(タイ): 6名・1ヶ月  ディボネグロ大学(インドネシア): 1名・1ヶ月  バンドン工科大学(インドネシア): 1名・3ヶ月
検査	令和元年度	アンヘレンス(フィリピン): 大学1名・5日間  台北医学大学(台湾): 2名・4日間

## 4-3) 社会貢献の実績

## 1. 保健学公開講座

開催日	活動の概要
平成24年 9月 8日	<b>第10回</b> 会 場：コラボステーションI 受講者：49名 テーマ：セーフティライフ 講演1 「災害は自助・共助の精神で」 原田博子准教授 講演2 「『放射線』を考えるヒント」 納富昭弘准教授 講演3 「糖尿病にならないために、上手に付き合っていくために」 勝田仁講師
平成25年 9月21日	<b>第11回</b> 会 場：百年講堂中ホール 受講者：105名(一般：80名、本学教員：25名) テーマ：保健学から見た身近な健康 講演1 「生活習慣病とメタボ検診」 栢森裕三教授 講演2 「歯の健康」 吉田豊助教 講演3 「認知症を考える」 寺岡佐和講師
平成26年 9月13日	<b>第12回</b> 会 場：百年講堂中ホール 受講者：92名(一般：68名、本学教員：24名) テーマ：身近な健康を考える2～安全に健やかに～ 講演1 「医療における放射線—その貢献と安全性を考える—」 豊福不可依教授 講演2 「尿から見えるあなたの健康—今日も元気なおしっこ出ますか?—」 外園栄作講師 講演3 「男性と女性：SexとGenderに深く関与する健康問題—あなたの人生を振り返って—」 谷口初美教授
平成27年 8月29日	<b>第13回</b> 会 場：百年講堂中ホール 受講者：69名(一般：44名、本学教員：25名) テーマ：身近な健康を考える3～健やかな毎日をおくるために～ 講演1 「運動器障害とQOL」 藤田君支教授 講演2 「輸血に関するあれこれ」 栗崎宏憲助教 講演3 「PET-CT 検査によるがん検診」 三輪建太助教
平成28年 9月 3日	<b>第14回</b> 会 場：百年講堂中ホール 受講者：44名(一般：30名、本学教員：14名) テーマ：身近な医療知識—私達の健康を考える 講演1 「統計からみるお産事情」 川田紀美子准教授 講演2 「暮らしの中の放射線被ばく」 藤淵俊王准教授 講演3 「病理のおはなし」 平橋美奈子講師
平成29年 9月 9日	<b>第15回</b> 会 場：保健学科本館 受講者：62名(一般：38名、本学教員：24名) テーマ：自分を守る、家族を守る、医療と保健の知識 講演1 「寒い季節は要注意!入浴中のヒートショック」 橋口暢子教授 講演2 「切らずに治す、人に優しい放射線治療」 佐々木智成准教授 講演3 「血液のひみつ」 兵田朋子助教
平成30年 9月15日	<b>第16回</b> 会 場：保健学科本館 受講者：79名(一般：58名、本学教員：21名) テーマ：広げよう医療と保健の知識～今を健康に生きるために～ 講演1 「胎児のころから始まるヒトの健康」 諸隈誠一教授 講演2 「最新のX線画像検査」 田中延和助教 講演3 「超音波検査、何を見てる?」 安田洋子助教
令和元年 9月 7日	<b>第17回</b> 会 場：保健学科本館 受講者：81名(一般：55名、本学教員：26名) テーマ：広げよう医療と保健の知識2～永く健康に生きるために～ 講演1 「脳波で何がわかる?」 重藤寛史教授 講演2 「加齢と転倒～運動機能の観点から～」 能登裕子講師 講演3 「画像で心臓を観察してみよう」 河窪正照助教
令和2年 9月	新型コロナウイルス感染症拡大のため中止
令和3年 9月	新型コロナウイルス感染症拡大のため中止

## 2. 保健学部門FD

開催日	活動の概要
平成24年 9月26日	会 場：総合研究棟102室 参加者：54名(看護：32名、放射：10名、検査：12名) テーマ：大学病院との連携
平成25年 9月25日	会 場：総合研究棟102室ほか 参加者：54名(看護：29名、放射：12名、検査：13名) テーマ：保健学科における教育方法の改善 講 演：「医療系教育に関する最近の話題」 医学教育部門・吉田素文教授
平成26年 9月24日	会 場：総合研究棟102室ほか 参加者：47名(看護：25名、放射：10名、検査：12名) テーマ：新GPA制度について 講 演：「GPA制度を正しく活用して、教育の質の向上を図ろう!」 教育改革企画支援室
平成27年 9月16日	会 場：総合研究棟102室ほか 参加者：55名(看護：29名、放射：11名、検査：15名) テーマ：教育力セルフマネジメントプログラム 講 演：「教育力セルフマネジメントプログラム」 大池美也子教授
平成28年 9月 7日	会 場：保健学科本館ほか 参加者：51名(看護：29名、放射：8名、検査：14名) テーマ：なぜ国際化が必要か 講 演：「部局の国際化を考える」 緒方副学長
平成29年 2月21日	会 場：保健学科本館ほか 参加者：52名(看護：30名、放射：11名、検査：11名) テーマ：三専攻共通教育の在り方 講 演：「共通科目WG報告」 大喜雅文保健学部門長
平成30年 9月20日	会 場：総合研究棟105室ほか 参加者：50名(看護：28名、放射：10名、検査：12名) テーマ：新入試制度QUBE導入に向けて 講 演：「保健学科入試の変遷と現状について」 佐々木雅之入試実施委員長 「QUBEの概要および取組事例等について」 アドミッションセンター・立脇洋介准教授
令和元年 9月19日	会 場：保健学科本館ほか 参加者：52名(看護：30名、放射：10名、検査：12名) テーマ：医学部保健学科の教育における合理的配慮を考える 講 演：「九州大学における合理的配慮の取組みについて」 基幹教育院キャンパスライフ・健康支援センター・横田晋務准教授
令和2年 9月17日	会 場：オンライン(Zoom) 参加者：56名(看護：31名、放射：11名、検査：14名) テーマ：遠隔授業の現状を踏まえた今後の活用に向けて! 講 演：「遠隔授業とその周辺」 情報基盤研究開発センター教育情報基盤研究部門・多川孝央学術研究員
令和3年 9月22日	会 場：オンライン(Zoom) 参加者：58名(看護：33名、放射：11名、検査：14名)+他部門の参加者2名 テーマ：With/Postコロナ時代の保健学実習・講義のあり方 講 演：「With/Postコロナ時代の保健学実習・講義のあり方」 自治医科大学医学教育センター・松山泰准教授

## 4-4) プロジェクトの実績

九州大学教育の質向上支援プログラム (EEP)  
(2014年～2015年)

## 「教育力セルフケアマネジメントプログラム」

- ・2014年度 150万円 / 2015年度 160万円
- ・プロジェクトリーダー：大池美也子教授
- ・協力教員：原田博子准教授、橋口暢子准教授、能登裕子講師、道面千恵子助教

## 〈プログラム開発の背景〉

看護教育は質の高い看護職の育成に向けて、大学・大学院へと高等教育化の時代を迎えている。その中で看護教員は、多彩な能力と役割が求められているが、医療機関から教育機関へと移行した看護教員は、看護教員としての専門性を習得する体系的な学習を得ることもなく、教育活動に取り組まざるを得ないのが現状である。

看護教員が自己の教育活動を自信を持って推進していくには、教育に関する自己学習やそれを保証していくシステムが必要と考える。そこで、医療人育成に関わる教育者を対象に、「教育力セルフケアマネジメントプログラムの構築」を行った。

## 〈プログラムの概要〉

## 1) セルフケアマネジメントプログラムの開発

- ① 教育力を主要な教育活動として、「準備・企画」「運営・実践」「評価」「改善」「統合」に大別し、各項目の概説とテストを作成した。
- ② 作成したプログラムをオンライン上で学習できるよう、九州大学Web学習システムにコース設定した。

## 各項目における概説とテスト

項目	主な内容	概要 (解説)	設問 (テスト)
準備・企画編	授業設計、実施のために必要となる基礎知識	49枚	20問
運営・実践編	授業中の教育活動において必要となる留意事項など	50枚	20問
評価編	授業実施中、実施後の評価方法など	33枚	20問
改善編	授業を改善するための基礎的知識	30枚	20問
統合編	教育活動全体において必要となる基礎知識	50枚	20問
		212枚	100問

## 2) プログラムの活用

開発したプログラムをホームページにて広く広報するとともに、プログラム受講希望者にアクセス権を付与し、実際に活用できるシステムを構築した。



## 〈活動実績〉

- 1) 2015年度保健学部FDにて、本プログラムについての講演および演習を行った。  
テーマ「教育力セルフケアマネジメントプログラム」  
実施日：2015年9月16日 総合研究棟ITルーム 参加者：57名  
本プログラムの開発の背景と概要についての講演のあと、ITルームのPCを使用し、参加者がプログラムを体験する演習を行った。
- 2) 学術集会において、看護教育に携わる教員等へプログラムの紹介を行った。  
テーマ「医療人育成に関わる教育者のための教育力セルフケアマネジメントプログラムの構築に向けた取り組み」  
学会名：日本看護学教育学会第25回学術集会、交流セッション  
実施日：2015年8月19日 徳島アステイ 参加者：31名



## 教育の質向上支援プログラム (NEEP) (2019年～2020年)

### 「保健学における国際教育・研究における ジェミニ・プロジェクトの推進」

- 2019年度 290万円 / 2020年度 290万円
- プロジェクト統括：樗木晶子教授
- 協力部局：九州大学病院 国際医療部

#### 〈プログラム開発の背景と目的〉

国際医療の場で活躍し、研究プロジェクトを指揮できる保健医療専門職の育成は重要な課題である。本取組はこれらを加速させるため、保健学部門と九州大学病院国際医療部の2部局の協力により(ジェミニ：双子の協力)、保健学部門の学部生や大学院生の短期留学やその継続化、学部と大学院教育の国際化、教育と研究における更なるグローバル化を図り、医療の一翼を担う保健学の教育・研究の活性化を目指す。

#### 〈プログラムの概要〉

主な取り組み内容は下記の通りである。

- ① 保健学サマースクール開設や保健学国際フォーラムの開催により、海外の複数の国の保健医療専門職を目指す学生との国際交流を活性化する(インバウンド)
- ② 学部生の短期留学により海外の医療福祉の実際を学ぶとともに、大学院生の国際的研究発表を促進する(アウトバウンド)
- ③ 九州大学病院国際医療部と連携し、遠隔医療教育システムを活用した学生と教員の教育・研究交流基盤の発展と継続化を図る

#### 〈活動実績〉

##### 2019年度

- ① 看護学分野では、サマースクールのプログラムを作成し、7月に2週間、マヒドン大学、高雄医学大学、香港大学より計9名の留学生を受け入れた。また、検査学分野では、アンヘンス大学より1名、台北医学大学より2名受け入れを行い、留学生受入大学の拡大を図った。さらに、医用量子線科学分野では、マヒドン大学、デイボネゴロ大学、バンドン工科大学と多くの大学より受け入れを行った。
- ② 学部生は、(看護)マヒドン大学2名、(検査)マラヤ大学1名、大学院生等は、(放射)高麗大学、マヒドン大学3名、精華大学2名等の派遣を行い、学生間の国際交流を行った。

- ③ 九州大学病院国際医療部の協力により7月に開催されたQRシンポジウム(伊都キャンパス)に保健学部門より3名(マヒドン大学、サバ大学、高麗大学)の海外研究者を招聘した。その講演内容は「国際医療と保健」、「検査技術学特別研究」などの科目履修者に視聴させ多くの学生に海外における保健医療の現状、課題について触れる機会を設けた。また、オウル大学(フィンランド)、香港大学など、海外から研究者が来訪した際には、国際医療部の遠隔システムの概要を説明する機会を設け、システム活用の可能性について意見交換を行った。

##### 2020年度

新型コロナウイルス感染症の発生、拡大により、対面での国際交流の実施が困難となりプログラムの計画変更を行った。

本プログラムの支援により、講義室にハイブリット用のシステムを導入し、国際医療部より技術支援を受け、国際フォーラムはオンラインで開催した。また、他大学で開催されたオンラインプログラムに参加することなどにより、学生間の国際交流の継続を図った。



短期留学受け入れ



サバ大学訪問



オウル大学から訪問



QRシンポジウム参加



## 実践的な課題解決能力を持つ 高度放射線防護人材育成プログラム

(2021年～2025年)

- 予算額：環境省原子力人材育成等推進事業費補助金より1億5000万円予定
- 実施責任者：佐々木雅之教授
- 連携分野：医用量子線科学分野、アイソトープ統合安全管理センター、東北大学大学院医学系研究科保健学専攻 放射線検査学分野
- 協力教員：藤淵俊王、有村秀孝、藪内英剛、杜下淳次、荒川弘之

### 〈プログラム開発の背景〉

原子力規制庁では、原子力規制を着実に進めていくことを目的として、広く原子力安全・原子力規制に係る人材を確保・育成するため、平成28年度から大学等と連携した原子力規制人材育成事業を実施している。現在、全国の診療放射線技師養成校の入学定員は3,000名を超え、施設数・定員数も増加傾向にある。保健学科放射線技術科学専攻の学部生や大学院生を主な対象として、従来の放射線安全管理に関する教育に加え、放射線防護に関する高度で実践的な講義・演習・実習を実施することで、放射線規制のエキスパートとして行政機関や教育・研究機関へ課題解決能力をもった人材を輩出することを目的とする。

### 〈プログラムの概要〉

九州大学、東北大学、玄海および女川原子力発電所、福島第一原子力発電所の人的資源や施設環境を生かした実践的なプログラム（放射線規制人材育成プログラムおよび原子力災害対応人材育成プログラム）を展開し、相互連携および交流を図る。

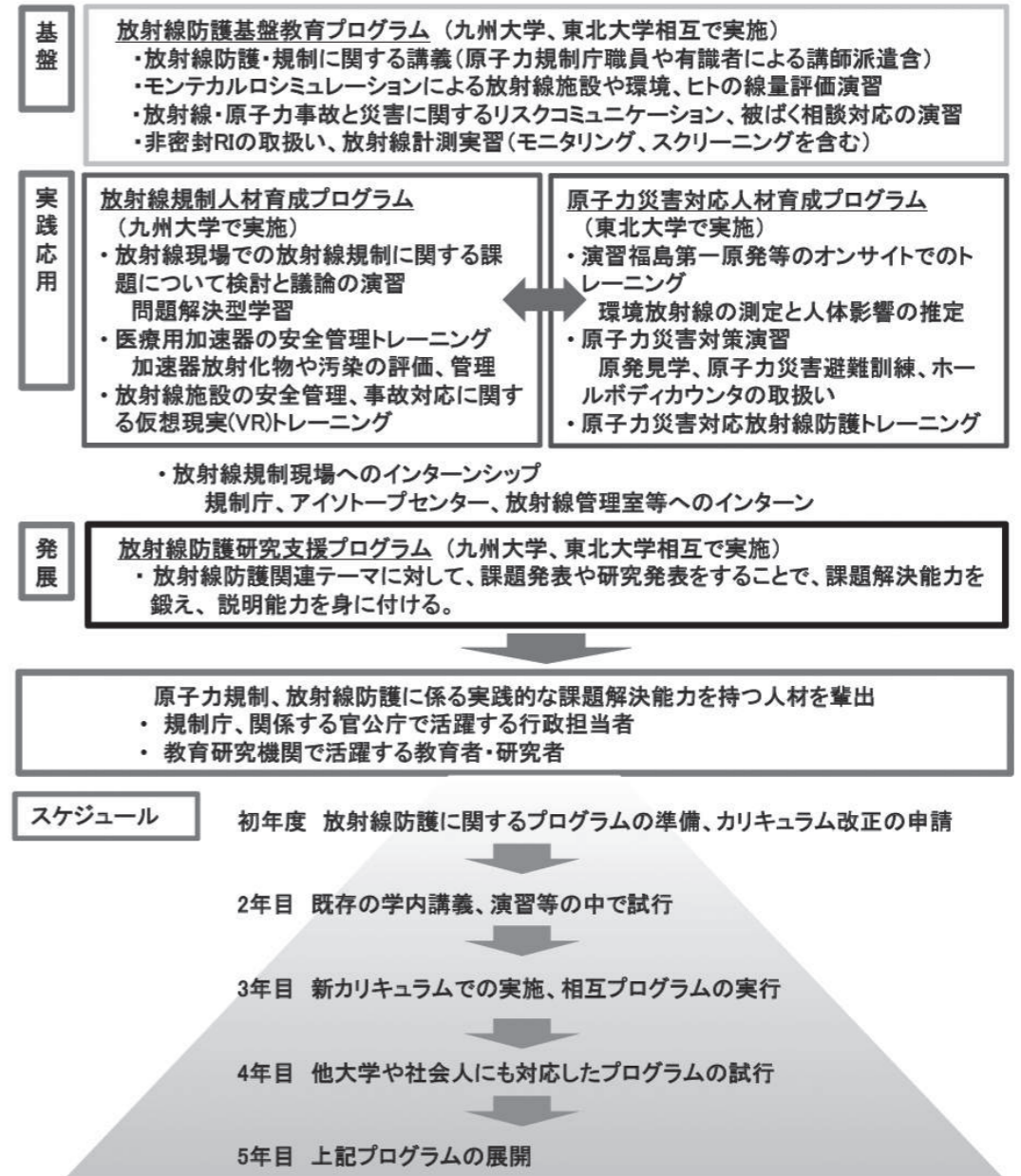
### 〈プログラムの成果目標〉

- 放射線規制分野への優秀な人材の確保
- 地域医療を支える専門性の高い医療従事者の輩出
- 原子力規制に係る行政職員をはじめとして、教育・研究機関への質の高い人材の輩出

### 実践的な課題解決能力を持つ高度放射線防護人材の育成

**事業概要** 保健学科放射線技術科学専攻の学生および大学院生を主な対象に、九州大学、東北大学の人的資源、設備環境や強みを生かし、相互プログラムの連携を図ることで事業に相乗効果を持たせ、放射線規制のエキスパートとして行政機関、また放射線防護の研究・教育現場を牽引できる人材を輩出する。

**対象**：保健学科放射線技術科専攻の学部生、大学院生等



## 実践能力強化型チーム医療加速プログラム

(2014年～2019年)

- ・予算額：文部科学省より1億800万円
- ・プロジェクトリーダー：杜下淳次教授
- ・連携分野：医用量子線科学分野および検査技術科学分野

### 〈プログラム開発の背景〉

「実践能力強化型チーム医療加速プログラム」は、【課題解決型高度医療人材養成プログラムの取組2】の生体機能診断支援領域に医用量子線科学分野と検査技術科学分野が文部科学省に申請した5年のプロジェクトである。本プログラムでは、医療のなかで重要な役割を担っている診療放射線技師と臨床検査技師が、高度化する医療技術への対応力を高め、医療安全管理に関しても知識と実践力をもつ学部生・大学院生・大学教員・医療技術者と実習指導者を養成し、チーム医療を推進することを目指した。

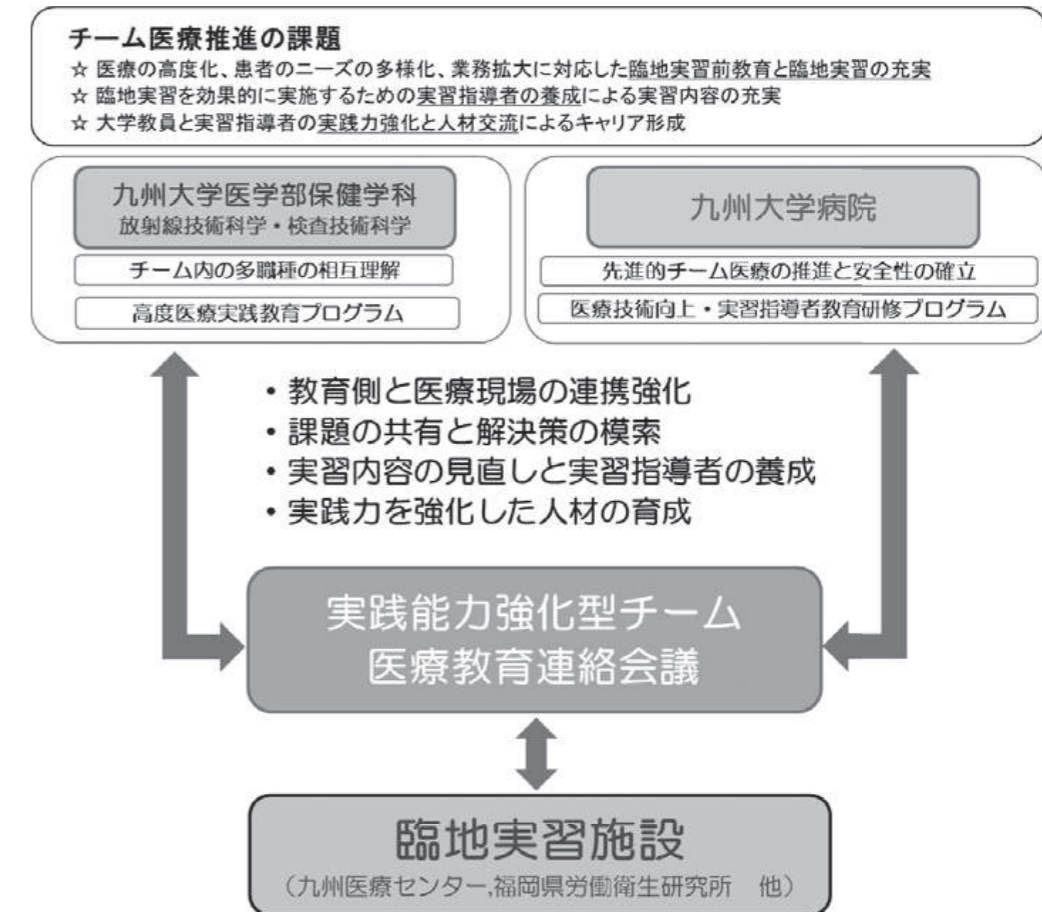
### 〈プログラムの概要〉

本プログラムは、医療技術の高度化、患者ニーズの多様化、診療放射線技師と臨床検査技師の業務拡大を意識して学部教育を改善する契機となったプロジェクトであり、5年間継続した。これには、保健学科で診療放射線技師や臨床検査技師の担当教員と、学生の臨地実習を受け入れて頂いている九州大学病院医療技術部に属する放射線部と検査部、そして独立行政法人国立病院機構九州医療センターと公益財団法人福岡労働衛生研究所に参画頂き、学内外の全面的なご理解とご協力のもとに実施できた。採択後2年目までは毎月、それ以降は隔月の教育連絡会議を設けた。その会議では、今後の学部教育に必要な講義内容や診療放射線技師と臨床検査技師の業務拡大にも対応できる教育内容を審議し、成果を振り返りながら改善していく過程を重視した。

このプロジェクトでは、学部教育の内容と臨地実習内容について、病院側と教育側が知恵を絞って実践的な教育カリキュラムを作り上げた。診療放射線技師と臨床検査技師の業務拡大が動きだした時期と重なったこともあり、全国の国立大学における診療放射線技師養成校や私立の診療放射線技師養成校、そして職能団体にも注目された。また、業務拡大を意識した新しい講義内容や実習内容を紹介させて頂くチャンスを得たことで全国に影響を及ぼすことができた。

また、このプログラムを通して、教員、社会人、そして在学生在が新しく業務として行えるようになった内容をシミュレーショントレーニングで身につけることを目指した企画も実現した。このほか、臨床に従事している医療技術者が大学の正式な手続きを経て、学部教育の一部に非常勤講師として教育に寄与した実績は、キャリア形成に繋がった。

一方、カリキュラム改正前に入学した在校生に対しては、主催した講演会とシミュレーション実習への参加を促した結果、医療現場で活躍する診療放射線技師と臨床検査技師が学びたいと考えるタイムリーな講演やスキルの知識共に学ぶことができた。



### 〈プログラムの成果〉

- ・業務拡大を意識したカリキュラムの改訂を実施
  - ⇒ 医療安全学、実践画像技術学、臨床解剖薬理学、医療安全・バイオリスク管理および実習
- ・実践画像技術学の実施
  - ⇒ 学生が病院へ行く前により実践的な知識を病院スタッフが講義
- ・医学部医学科、歯学部、薬学、保健学科が科目履修を共有（合同講義）
  - ⇒ 学生時代からチーム医療を意識する契機
- ・業務拡大を踏まえた新しいトレーニングを学生に提供し修了書を授与
  - ⇒ 実践能力の向上に寄与（一部は卒業後教育にも寄与）
- ・臨地実習指導要領の策定と活用
  - ⇒ 複数の施設と大学が情報の共有（内容と到達目標）
- ・タブレット端末の病院実習での活用
  - ⇒ 病院での実習環境の改善
- ・6回の臨地実習指導講習会（兼、医療技術向上・実習指導者教育研修プログラム）実施
  - ⇒ 教育側と病院側が最先端の知識を共有、実習指導者の育成
- ・若手教員が業務として病院で週1回研修
  - ⇒ 最新の放射線診療で求められる知識と技術を教育へ還元（実践力維持）

## 編集後記

本記念誌は、本学科の主に設立10周年から20周年までの10年間の歩みの記録として、この発展の時期に関わられた教員、学生、関係の先生方の想いを集めています。また、この間に行われた活動に関するデータを資料編としてまとめています。教育・研究成果、国際交流、社会貢献に関連した活動を、包括的、多角的に振り返ることが可能となるようにしました。データの収集、整理には編集委員の方々に大変ご尽力いただきました。

本記念誌が、本学科の設立10周年から20周年に至る活動の記録となるとともに、今後進むべき方向を見出す手がかりとして、関係の方々と共有できるものとなれば幸いです。

令和4年12月吉日

---

九州大学医学部保健学科20周年記念誌編集委員会

保健学部門長 / 編集委員長

藪内英剛

編集委員

橋口暢子	松尾和枝	岩木三保
道面千恵子	薬師寺佳菜子	藤井紗也
有村秀孝	近藤雅敏	河窪正照
田中延和	内海 健	栗崎宏憲
安田洋子	塩津弘倫	金納紀子

---

九州大学医学部保健学科20周年記念誌

発行日 2022年12月15日

発行者 九州大学医学部保健学科20周年記念誌編集委員会

〒812-8582 福岡市東区馬出3丁目1番1号

TEL 092-642-6680

印刷 株式会社ミドリ印刷

〒812-0016 福岡市博多区博多駅南6丁目17-12



九州大学  
KYUSHU UNIVERSITY